

第2章 千曲市の維持向上すべき歴史的風致

1. 歴史的風致に関する概要、分布状況

歴史的風致とは歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

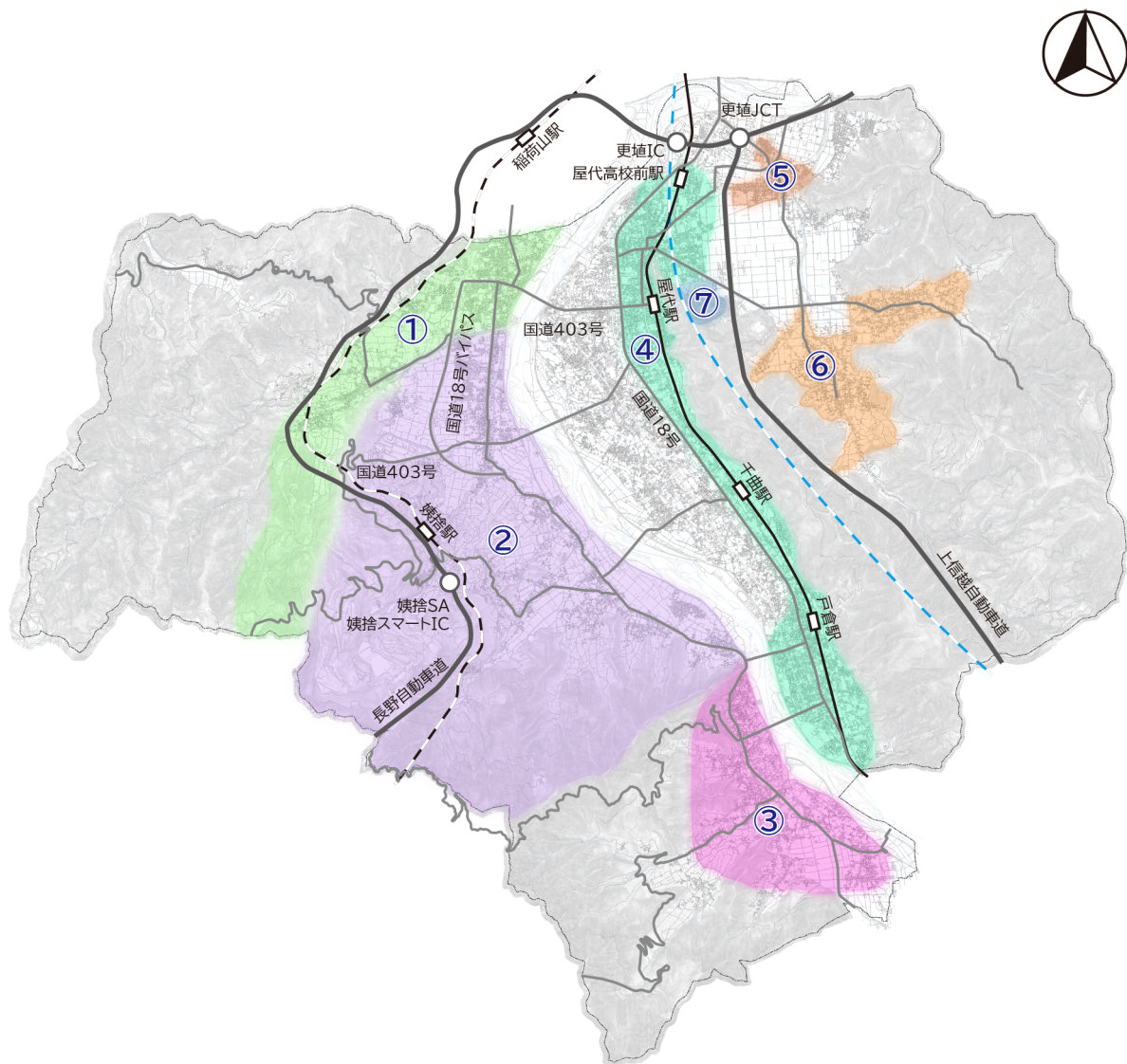
本市は、市域の中央を市名の由来ともなった千曲川が北流し、千曲川の沖積地に形成された肥沃な生産力を背景に古くから発展してきた。また、北国街道と北国脇往還（善光寺街道）の結節点に位置するため、交通の要衝として人流、物流の拠点としても発展を遂げてきた。

千曲川右岸である川東地域には、長野県下最大の前方後円墳である森將軍塚古墳が山上に築造されており、そのふもとの屋代遺跡群からは国府木簡等の出土があり、初期国府が存在していた可能性が指摘されている。雨宮坐日吉神社で催行されている御神事は400年以上の歴史があるとされ、橋の上から獅子頭を持った人を逆さに吊るし、川面で獅子頭を振る「橋懸り」が行われる。北国街道には戸倉宿、屋代宿が形成され、江戸と北陸方面を結ぶ重要な街道として発展した。また、松代藩の殖産興業策として杏の栽培が奨励され、森、倉科地区は「一目十万本」と呼ばれる杏の名所となっている。

川西地域では、姨捨山（冠着山）^{おばすてやま かむりきやま} 一帯が月の名所として著名であり、平安時代の和歌にも取り上げられている。戦国時代以降、冠着山南東斜面に大池の湧水を利用した棚田が拓かれ、「田毎の月」として和歌や俳句の聖地となっていた。善光寺街道には稲荷山宿と間の宿として桑原宿が置かれた。稲荷山宿は戦国時代に上杉景勝が稲荷山城を築いたことが発祥とされ、善光寺街道の宿場町として発展するとともに、物資の集積地として商家町としてさかえた。戸倉上山田温泉は明治時代中期に開湯された温泉街で、「善光寺詣りの精進落としの湯」として栄えた。開湯120周年を超え、現在では昭和ロマンあふれる温泉街となっている。

このように本市には千曲川の両岸に古代から連綿と続くそれぞれ特色のある町並みが形成され、各地区における人々の営みの中に特色を持った地域固有の歴史と伝統を反映した活動と、その活動が行われる歴史的価値の高い建造物等が一体となった歴史的風致を形成している。

本市の維持向上すべき歴史的風致として7つを取り上げ、それぞれに建造物、人々の活動を主として整理する。



凡例

- ① …善光寺街道沿いにみる歴史的風致
- ② …更級の名月と姨捨の棚田にみる歴史的風致
- ③ …戸倉上山田温泉にみる歴史的風致
- ④ …北国街道沿いにみる歴史的風致
- ⑤ …雨宮坐日吉神社にみる歴史的風致
- ⑥ …あんずの里にみる歴史的風致
- ⑦ …森將軍塚古墳にみる歴史的風致

0 1 2km

千曲市歴史的風致位置図

2. 歴史的風致の内容

(1) 善光寺街道沿いにみる歴史的風致

ア はじめに

善光寺街道は江戸時代に整備された街道で、「北国脇往還」^{なかせんどう}とも呼ばれている。中山道洗馬宿^{ばしゆく}で分かれて北に向かい、松本宿^{おみじゆく}・麻績宿^{さね}を経て猿ヶ馬場峠^{さるがばんばとうげ}を越え、桑原・稲荷山宿^{いなぎやま}を通り篠ノ井追分宿^{おいわけじゆく}で北国街道と合流する街道である。

稲荷山宿は、天正12年(1584)に上杉景勝が稲荷山城を築城した際に町なみが形成されたと伝わっている。慶長7年(1602)、中山道の伝馬制度^{でんま}が定められ、稲荷山は善光寺街道の宿場となった。この街道は、善光寺詣りの参詣路^{さんけいろう}だけでなく松本方面と善光寺方面を結ぶ物資の輸送路としての役割もあった。天保13年(1842)における稲荷山の諸商売の記録を見ると、111軒の内、太物^{ふともの}(綿花・綿織物)を扱う店が34軒、太物と他の品を扱う店が10軒、旅籠^{はたご}6軒、茶屋10軒などとなっており、太物を扱う商業地として栄えていた様子が見て取れる。

弘化4年(1847)に発生した善光寺地震により稲荷山宿は甚大な被害を受け、地震後の火災により町なみのほとんどが焼失してしまった。この地震は、善光寺の御開帳の最中に発生したものであり、住民の他、善光寺詣りの旅人が多数犠牲となった。現在の町なみは、善光寺地震からの復興を遂げたものが基礎となっており、幕末から昭和初期にかけて建築された建物が伝統的なまちなみを形成している。

明治時代になると、稲荷山は綿業に代わり繭^{まゆ}や生糸^{きいと}の取次を行う商業地として更に発展した。明治23年(1890)の長野県町村課税格付けによると、長野町、松本町に次いで三等となり主要商業地としての地位を占め、「北信の商都」と呼ばれるようになった。商業の発展に伴い、金融業も盛んとなり、明治14年(1881)には稲荷山銀行(のちに第六十三銀行、八十二銀行の前身)が創業した。明治中期以降、信越線や篠ノ井線といった鉄道が開通すると、駅のない稲荷山に代わり、屋代や篠ノ井に物資が集積するようになり、商業地としての稲荷山の地位はしだいに低下していった。

猿ヶ馬場峠の上り口に当たる桑原地区には、寛永元年(1624)に伝馬屋敷^{でんまやしき}が設置され、間の宿として桑原宿が設置された。元禄7年(1694)の記録では、桑原宿の屋敷77軒のうち、46軒が伝馬役を務めていた。松代藩では、桑原宿を他領への出入り口として重要視しており、家臣の継立^{つぎたて}が行われていた。また、幕末の元治元年(1864)には、松代藩士の佐久間象山が京都へ上る途中、桑原宿の関家に宿泊している。

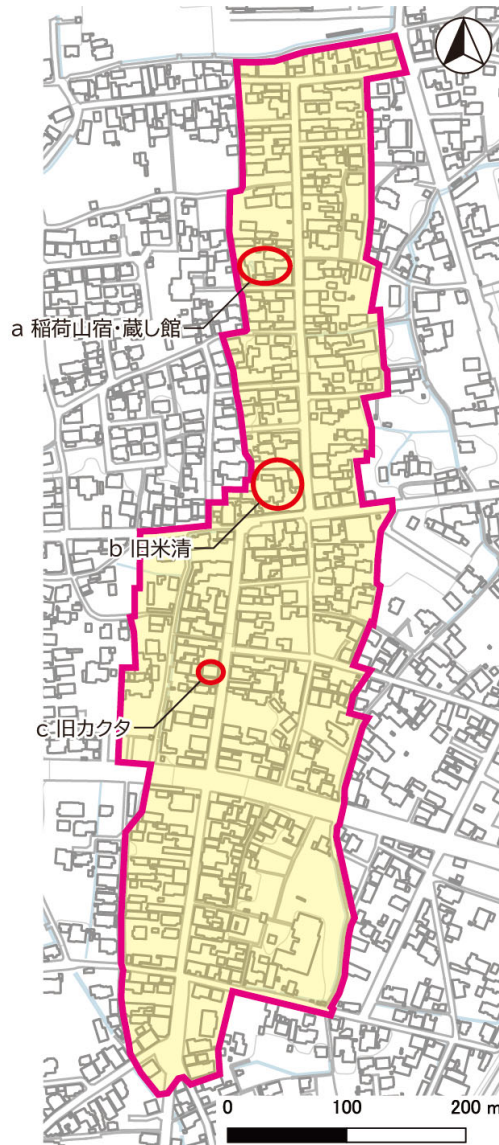
西部山地の山麓となる八幡大池から中原地区にかけては、「八幡の七清水^{ななしみず}(七頭^{ななしら})」と呼ばれる湧水群があり、豊富な湧水が湧き出している。この湧水は山麓斜面の棚田の水源となっているほか、棚田で収穫された米を利用した酒造りに利用されている。元禄2年(1689)創業の造り酒屋が現在も酒造りを行っている。

猿ヶ馬場峠付近には往時の面影を残す道筋や一里塚、茶屋跡が残されており、「歴史の道百選」に選定されている。

イ 建造物等

(ア) 稲荷山伝統的建造物群保存地区

平成 26 年(2014)12 月に重要伝統的建造物群保存地区(以下、「重伝建地区」という。)に選定されている。江戸時代には善光寺街道の宿場町として機能していたが、19 世紀初頭から商家町として繁栄してきた。弘化 4 年(1847)の善光寺地震とその後に発生した火災により町は壊滅的な打撃を受けた。現在の町並みは、この善光寺地震からの復興を遂げたものが基礎となっている。町の中央を善光寺街道が南北に貫通し、中心部に街道がクランク状に屈曲する「鍵の手」を持っている。敷地は、街道に面して短冊形に細長く区切られ、前面に主屋、背面に土蔵や附属屋が建てられている形状が基本となっている。現存する建物の多くは、柱や軒裏までを土壁で塗り上げた大壁造りの建物が多く、火災の教訓を踏まえた防火意識の高いものとなっている。その一方で、茅葺の建物や茅葺を意識したと思われる屋根勾配の急な瓦葺の建物も建てられるなど、多様な形式の主屋が混在することが町並みの特徴となっている。



稲荷山伝統的建造物群保存地区範囲

a 稲荷山宿・蔵し館

重伝建地区の北部に位置している。幕末から明治にかけて、生糸輸出業や質屋業として繁栄した「カネヤマ松源製糸」の建物を整備したものである。明治初期の当主である松林源九郎は、「商売に国境なし」をモットーとして横浜に出向き、外国人を相手に生糸や蚕卵紙の輸出行い、成功を収めた。また、製糸工場の開発も進め、小規模ながらも工場設置に寄与した。

敷地は短冊形を呈しており、街道に面して主屋が建てられ、奥に蔵が立ち並ぶ町家形式となっている。かつては主屋と蔵の間に附属屋が建てられていたが、現在は取り壊されている。建築年代は善光寺地震の復興期と考えられていたが、令和6年度(2024)に実施した主屋の修理工事では和釘を使用していることが明らかとなった。このことから、主屋の建築年代は明治10年代以前に遡ることとなり、従来の建築年代の妥当性を示すものとなった。



稲荷山宿・蔵し館

b 旧米清

重伝建地区のほぼ中央、「鍵の手」にある。広い敷地をもっており、主屋と蔵が立ち並んでいる。

江戸時代の創業と伝わっており、主屋には「官許 清明丹」の看板が掛けられていて当初は薬屋を営んでいたことがわかる。明治25年(1892)の稲荷山町並図には「米屋清左衛門」の名が確認でき、白糍や味噌、書籍紙類を取り扱っていたことがわかり、明治時代前半には糍等の販売に転換していた。

敷地内には12棟の建造物等があり、登記簿等によると明治13年(1880)以前から明治25年(1892)にかけて建築されたことがわかる。



旧米清の建物群

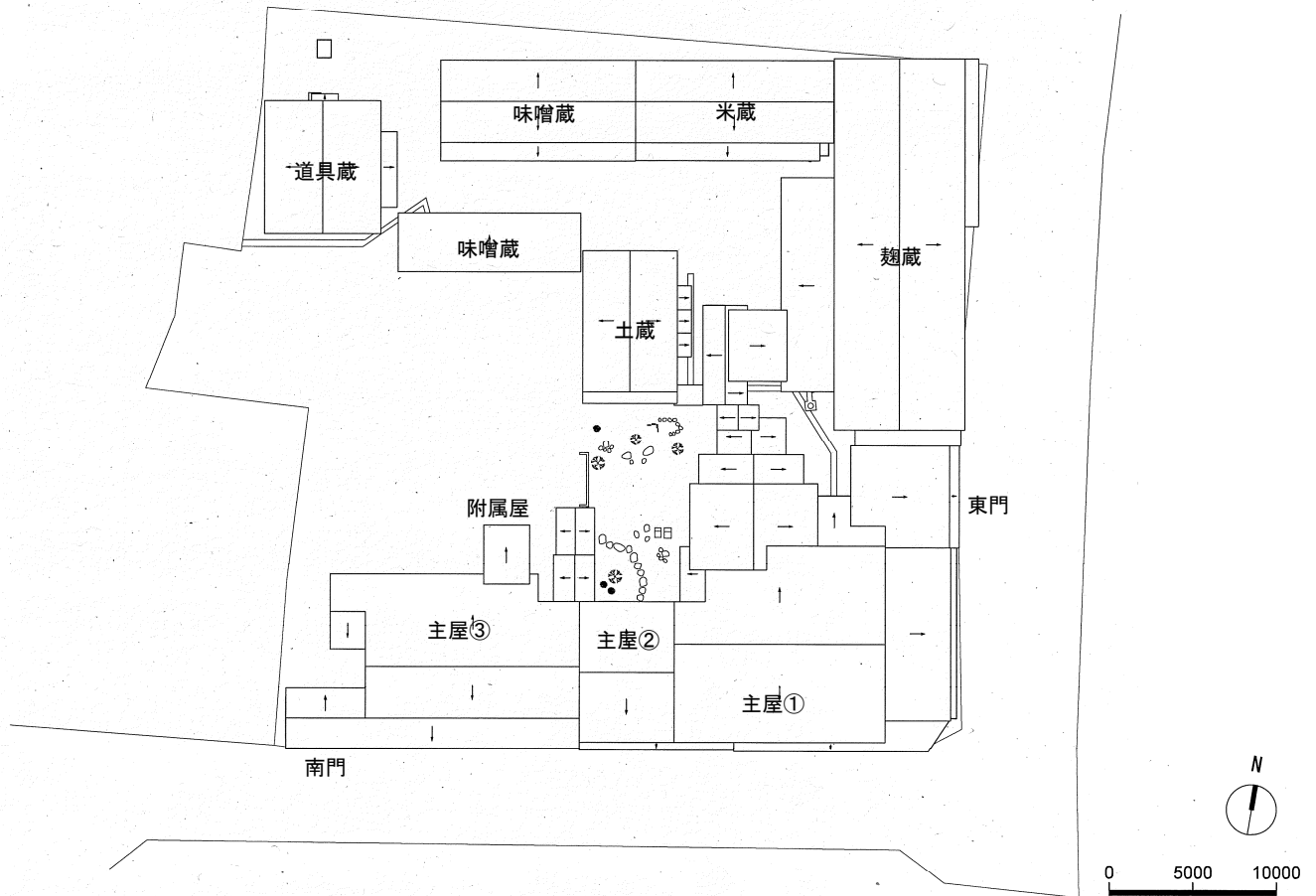
c 旧カクタ

重伝建地区の南寄りにあり、平成元年(1989)頃まで呉服屋を営んでいた。明治8年(1875)からの売上簿が残っていることから、創業は明治時代初期に遡ることは確実である。敷地は短冊形をしており奥に蔵が建っていたが、この蔵は西側に曳家されている。

主屋は間口5間半、奥行7間半の寄棟造瓦葺で、明治40年(1907)頃の建築と伝わっている。令和5年度(2023)に実施した修理工事の際、建築時の柱養生のために巻き付けられたと見られる明治36年(1903)の古新聞が発見され、建築年代の妥当性を示すものとなった。正面1階の桁はケヤキの一本物であり、経済力の高さを物語るものである。



旧カクタ



旧米清建物配置図

(イ) 日本聖公会中部教区稲荷山諸聖徒教会

(登録有形文化財)

稲荷山宿の善光寺街道沿いにある教会建築。基壇に建つ鉄筋コンクリート造切妻造りで、両側面にバトレス風の柱形を付し、外壁はモルタル仕上げとしている。単廊式で軸線上に会衆席、至聖所、聖所を並べ、地下に納骨堂を配している。

カナダ人宣教師 J・G・ウォーラーの監修により昭和 8 年 (1933) に建築された(『長野県の近代化遺産』平成 21 年 (2009) 長野県教育委員会)。鉄筋コンクリート造の教会建築としては、長野県最古級の建築となっている。



稲荷山諸聖徒教会

(ウ) 長野銘醸 (登録有形文化財)

善光寺街道の猿ヶ馬場峠への上り口にあたる、八幡中原地区にある。元禄 2 年 (1689) 創業の和田酒店を前身としている。明治初期の当主である和田郡平は、稲荷山銀行



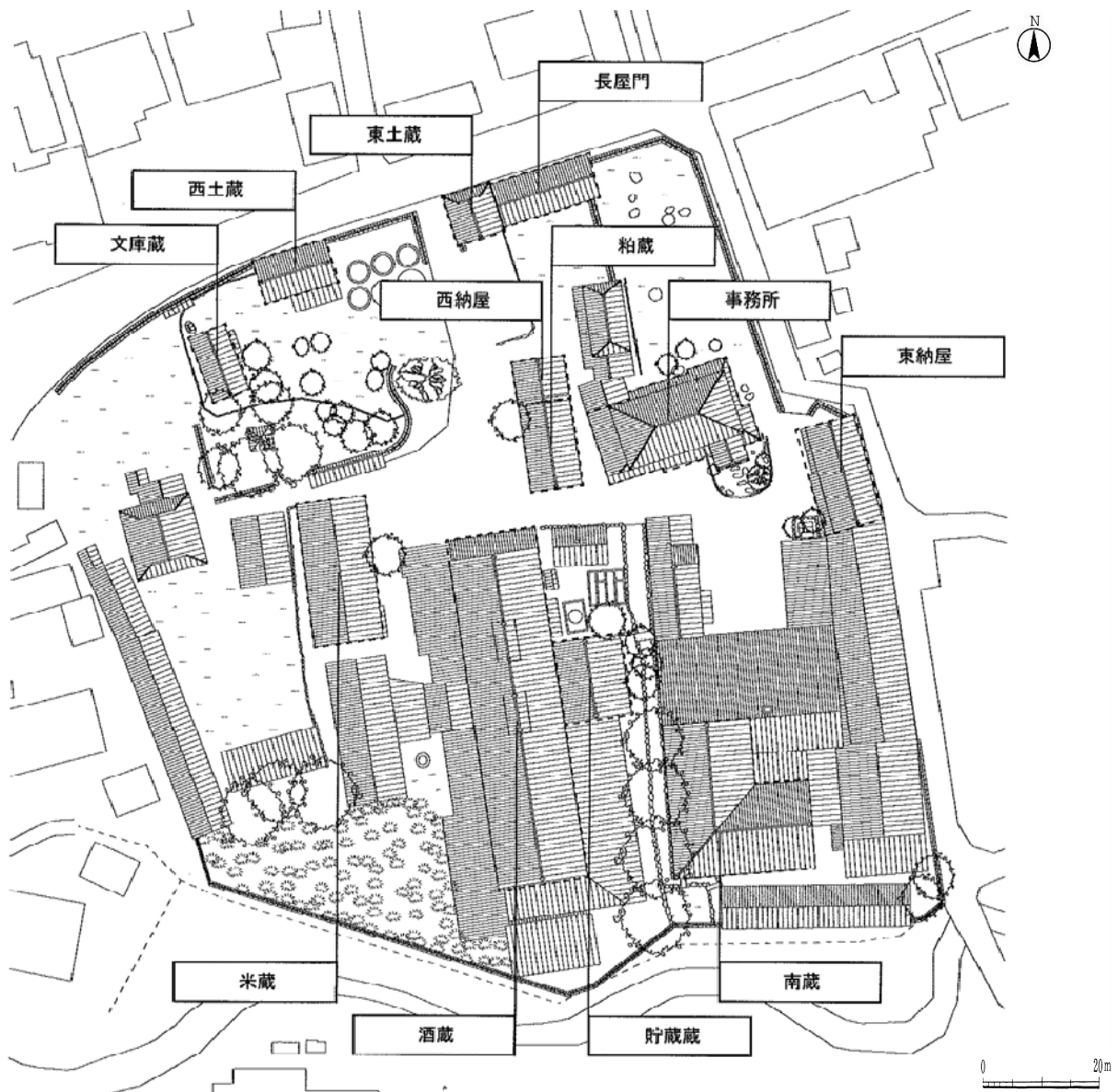
長野銘醸 酒蔵

(八十二銀行の前身の一つ)の初代頭取を務めたほか、小学校の建設に尽力するなど、当地域の近代化に大きく貢献した。また、農家の副業として、現在では長野県を代表する農産物となったリンゴの栽培を推奨し、長野県最古のリンゴ園を開いた。中原地区には現在も明治12年(1879)頃に植えられたリンゴの木が残されている。

酒蔵は間口6間、奥行き24間の2階建瓦葺の建物である。内部は南北に二つに分かれており、北側が「洗い場」、南側が「仕込蔵」と呼ばれている。明治前期に撮影された古写真に酒蔵が写っていることから、幕末から明治初期に建築されたものと考えられる。敷地内には、幕末から大正10年(1921)にかけて建てられた建築物等が残されており、この建物を利用して「オバステ正宗」の銘柄で現在も酒造りが行われている。



街道に面して建つ長屋門



長野銘醸建物配置

(エ) 善光寺街道

市域における善光寺街道は、麻績村境の猿ヶ馬場峠から長野市境となる稲荷山まで約 8kmの区間となる。猿ヶ馬場峠付近には未舗装の街道敷が残っており、茶屋の跡や石造物、一里塚が残されている。令和元年(2019)、歴史の道百選に選定された。

「火打石の茶屋」、「松崎の茶屋」は八幡中原地区の宮下家と松崎家が江戸時代から大正時代まで営んでいたと伝わっている。令和6年度(2024)に実施した松崎の茶屋跡の確認調査では、2棟の建物の礎石が見つかり、嘉永2年(1849)に描かれた善光寺街道名所図会のとおり、茶屋が存在していたことが裏付けられた。石造物には、「念仏石」や「くつ打ち場」、「日本廻国供養塔」などがあり、街道を行きかう人びとの安全を祈願したものと考えられ、現在でも供物が供えられている。



未舗装の街道敷



松崎の茶屋 建物礎石



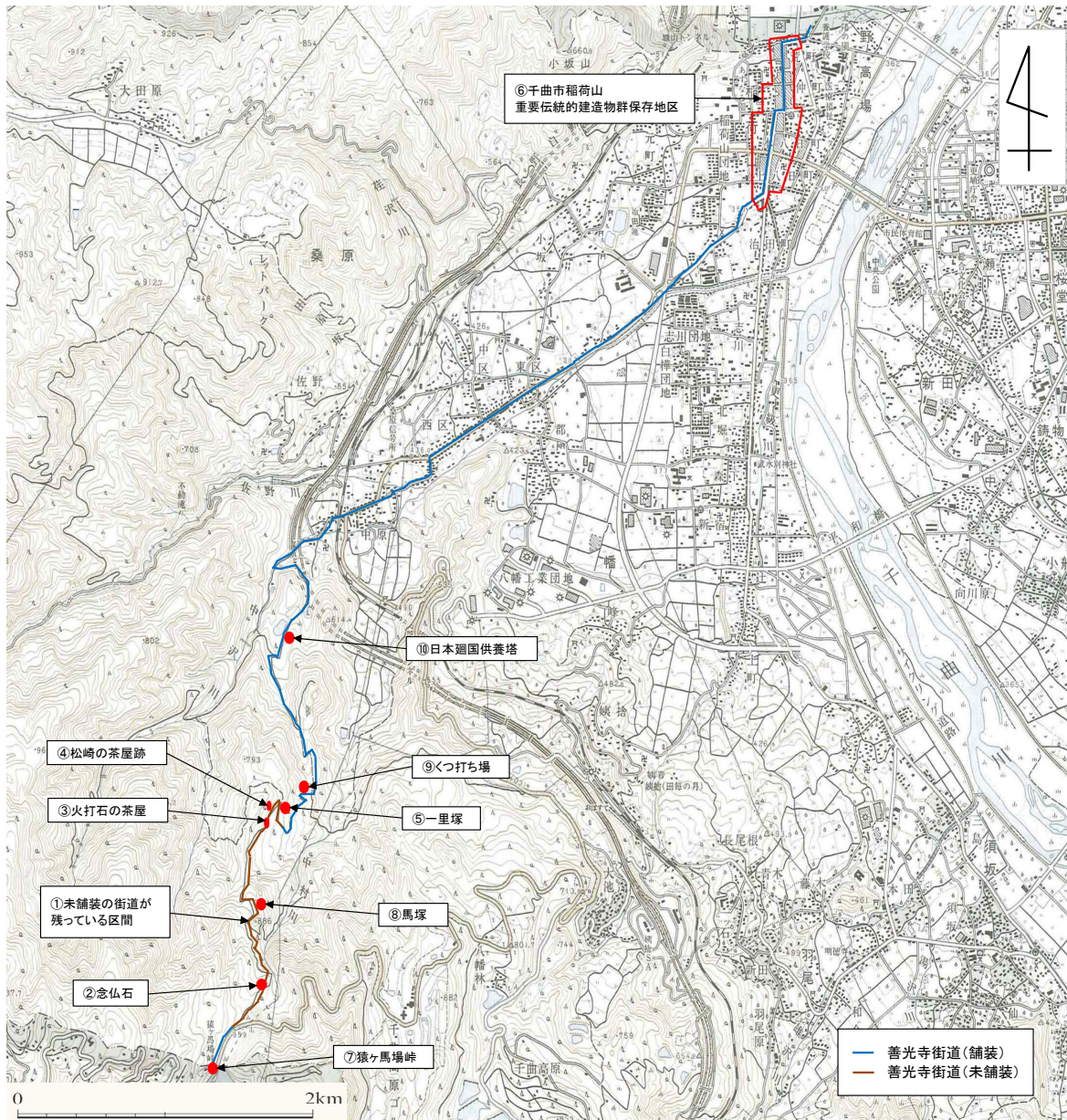
善光寺街道名所図会



念仏石



一里塚



善光寺街道

ウ 活動

(ア) 稲荷山祇園祭 (市指定無形民俗文化財)

享保 18 年(1733)に京都の八坂神社から牛頭天王ごずてんのうを勧請かんじょうして始まったと伝えられている。稲荷山が商業の街として発展すると、牛頭天王は「商売の神」として崇敬を集めるようになり、天明 5 年(1785)に祇園神輿を建造して祇園祭が盛大に開催されるようになった。しかし、弘化 4 年(1847)の善光寺地震と火災により街は壊滅的な被害を受け、神輿も焼失してしまった。地震の被害からの復興が進むにつれ祇園祭の再開が願われるようになり、慶応元年(1865)に神輿や四神像、剣龍像が新調された。この神輿



稲荷山祇園祭
神輿の巡行

は令和 4 年(2022)まで使用され新しい神輿に代わったが、現在も保存されている。

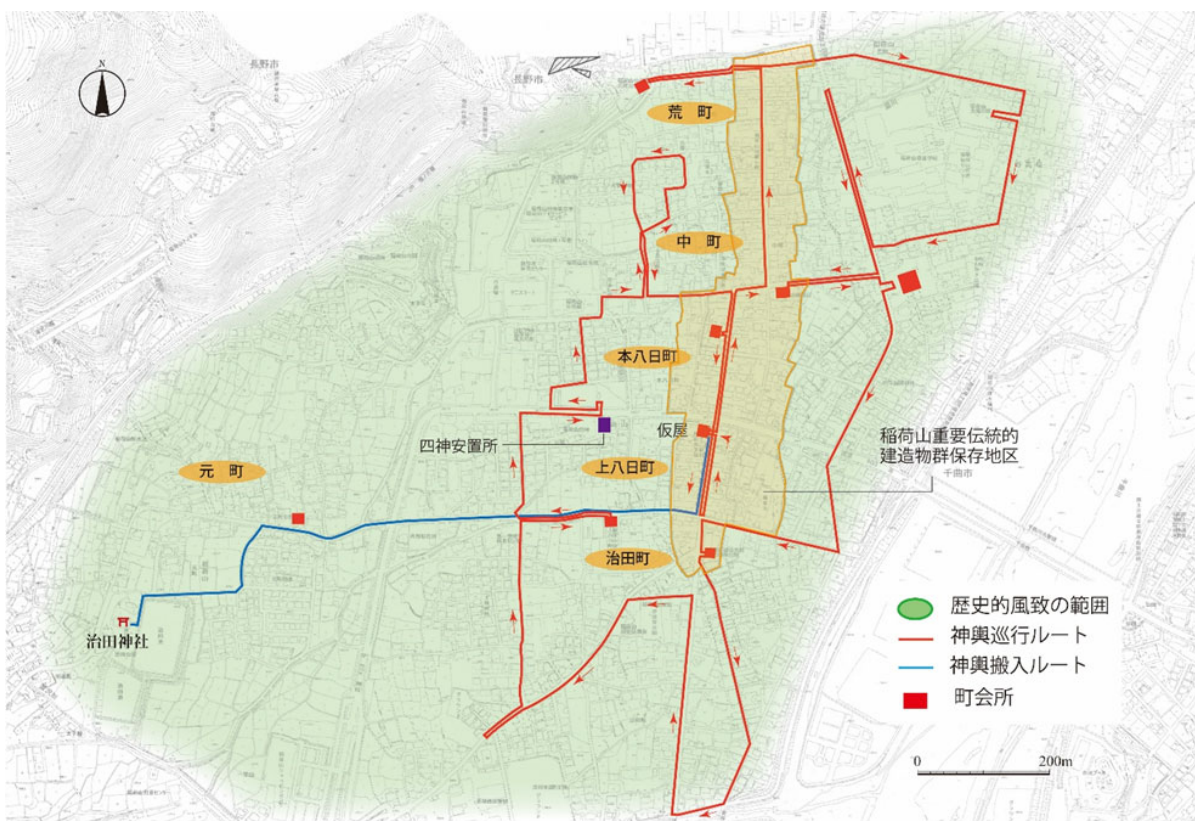
祭は 7 月中旬の 3 日間行われ、稲荷山地区の治田町・上八日町・本八日町・中町・荒町の順に 5 年に 1 回当番町を担当し、「天王下ろし」から「天王上げ」までの神事を取り仕切っている。第 1 日目は早朝から神輿巡行の道筋を清掃し、「天王下ろし」の神事が行われ、当番町に設けた御仮屋に神輿を遷座する。夕刻には「お魂入れ」の神事が行われる。第 2 日目は「宵祭り」で、夕刻から神輿の町内巡行、勇獅子の演舞が行われる。第 3 日目は「本祭り」となり、午前中の神輿渡御、勇獅子演舞に続き、山車や稚児行列の練りこみがみられる。正午から全町内を練り歩く神輿巡行となり、当番町の御仮屋に練りこんで「天王上げ」となる。元町の道祖神前で「お魂抜き」が行われ、治田神社の神楽庫に神輿が納められて、祭は終了となる。



勇獅子の演舞

稲荷山祇園祭は、善光寺街道の宿場であった稲荷山地区一帯で行われており、神輿と勇獅子の勇壮な渡御と演舞、山車と稚児行列のにぎやかな巡行が見られる、歴史と伝統を反映した人びとの活動が継承されている。

勇獅子は大正 5 年(1916)の治田神社拝殿新築の際に初めて奉納されたものであり、稲荷山勇獅子保存会により継承されている。勇獅子に曳かれる山車では、太鼓・笛・鉦・三味線に合わせ舞を披露し、祇園祭に華を添えている。また、少子高齢化による人口減少により神輿の担ぎ手が不足する中、平成 16 年(2004)には稲荷山神輿会が結成され、伝統の神輿巡行を支えている。



神輿巡行経路(上八日町区)

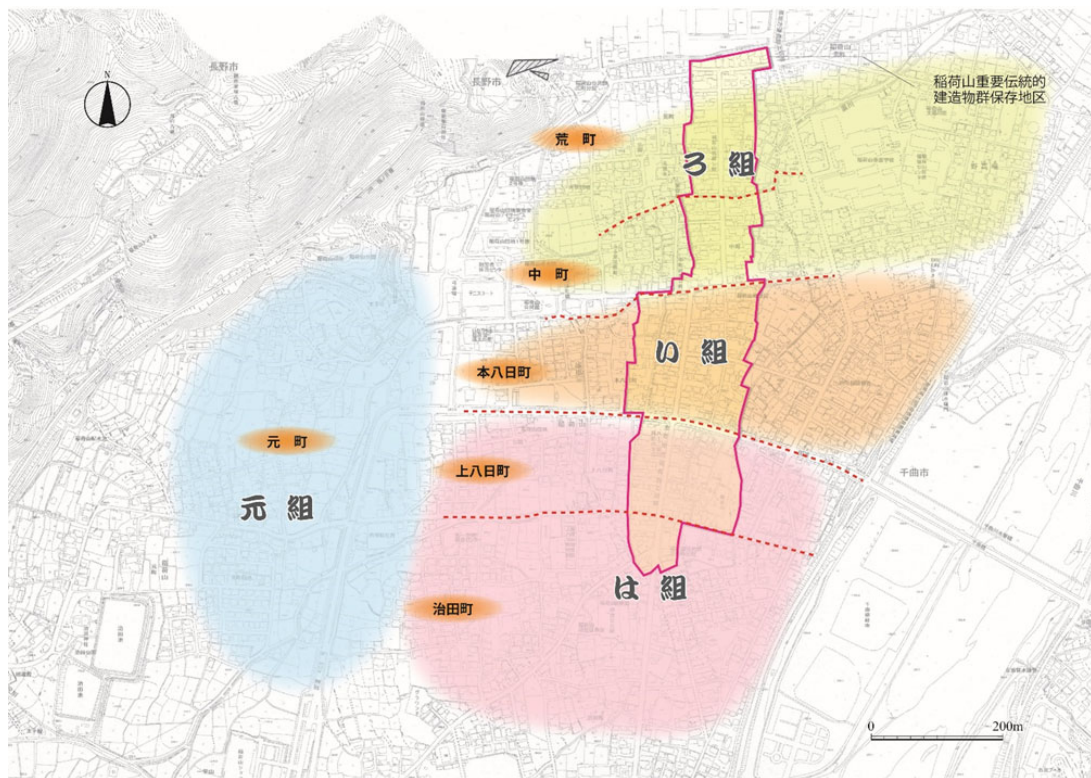
（イ）稲荷山自衛団

稲荷山地区には消防団とは別に、市内では唯一、各区長（自治会長）傘下の「稲荷山自衛団」が組織されている。稲荷山自衛団は、商業が盛んとなり、大小の町屋が密集して立ち並び、その防火対策が懸念されたことから、明治16年（1883）に自衛消防組織である「い組」消防組が結成されたことが端緒となっており、「稲荷山消防組」と銘の入った1908年製の手押し消防ポンプが残されている。現在は、い組のほか、ろ組、は組、元組が組織され、担当区域で消防器具の点検や防火パトロール、初期消火活動を担っている。



稲荷山消防組腕用ポンプ
(1908年製)

防火パトロールの夜回りでは、「火の用心」の掛け声とともに拍子木の音が地区内に響き渡る。



稲荷山自衛団活動範囲

（ウ）中原の獅子舞神楽

八幡中原地区に伝わる伊勢太々神楽系^{いせ だいたい かぐら}の獅子舞で、中原区神楽保存会によって継承されている。発祥は江戸時代中期と言われており、『武水別神社御頭帳』^{たけみずわけじんじや おうちょう}によると、安永8年(1779)に武水別神社の大頭祭にあたって「中原組太神楽」^{だいたい}が奉納された記録が残っている。善光寺平一帯の獅子舞神楽には、「中原神楽から学んだ」とする獅子舞が多く、旧更級郡、埴科郡における獅子舞の指標的役割を果たしてきたものと推測されている。



中原の獅子舞神楽

中原の獅子舞神楽は「太々神楽」と呼ばれる二人一組で演じる雌獅子舞^{めししまい}で、一人が獅子頭^{ししがしら}を操り、一人が獅子頭の後ろについて布さばきを補い、太鼓・笛・鉦の音に合わせて獅子舞が演じられるものである。獅子頭の持ち運びにはリヤカーに小型の神殿造りの神輿の下に獅子頭を納める長持ちを設けた神楽屋台を載せ、地区ごとの紋や模様のついた幕を張ったものが使われている。神輿の屋根には御幣を付けた角灯籠を付けている。神輿の正面には「五穀豊穡」、「天下泰平」などと書かれた角灯籠や太鼓が取り付けられ、演奏に用いられている。優美な鉦、横笛の音色に合わせて舞う獅子舞神楽は、地区の秋祭りや、武水別神社の仲秋祭、大頭祭で演じられる。

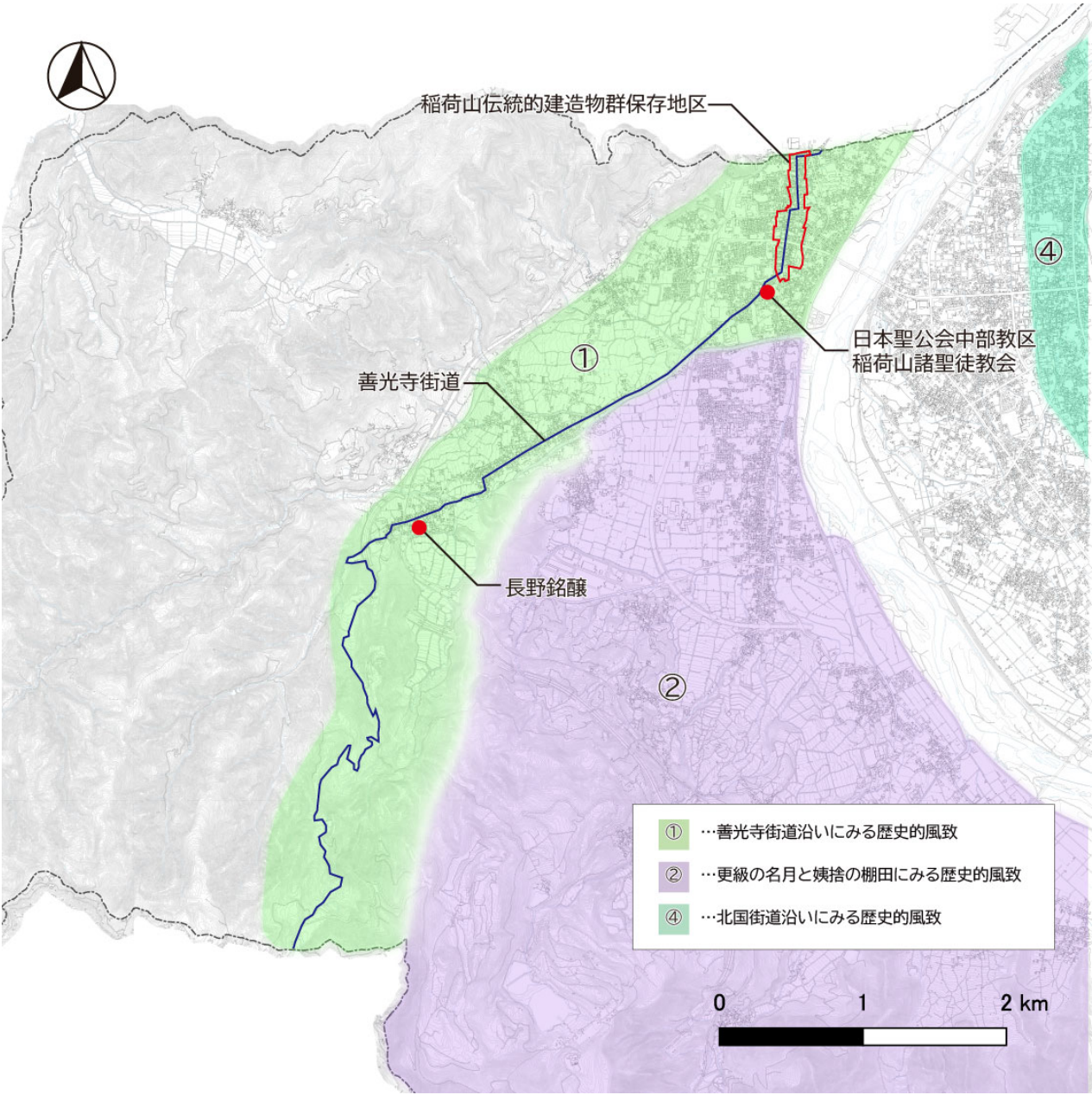
（エ）善光寺街道の保全活動

猿ヶ馬場峠を下った街道に沿った林道は、昭和28年(1953)に整備が進められたものである(『番場線林道関係綴』旧八幡村文書 昭和28年(1953))。街道筋に残されていた一里塚や石造物は、林道整備で保存が行われ、往時の面影を残している。現在は、千曲市川西地区振興連絡協議会が中心となり、街道や一里塚の草刈りや説明版の設置を続けている。

エ まとめ

善光寺街道は古くから交通の要衝として物流・人流の拠点として栄えていた。経済活動の発展に伴い、稲荷山祇園祭や中原の獅子舞神楽を始めとした民俗文化財が生み出され、現在に継承されている。また、災害の教訓を基とした防火意識の強い伝統的建造物群が形成され、この町並みを自ら守るため、自衛団が防災活動を行っている。

街道に沿って残されている歴史的な建造物と、そこで繰り広げられる民俗芸能の音楽や祭の掛け声は、本市の歴史的風致を特徴付けるものとなっている。



善光寺街道沿いにみる歴史的風致範囲

（２）更級の名月と姨捨の棚田にみる歴史的風致

ア はじめに

冠着山（標高 1,252m）山麓の更級地区は、平安時代から『古今和歌集』や『万葉集』に多数の和歌が詠まれ、「更級」は月の名所として広く知られてきた。高くそびえる冠着山は古くは、「姨捨山」と呼ばれていたが、中世以降、特に近代においては、より身近に行くことができる長楽寺周辺が「姨捨山」と呼ばれるようになった。松尾芭蕉をはじめとした文人墨客が訪れ、現在に至っても名月とともに「田毎の月」と称された棚田同様、俳諧や絵画、文学作品の題材とされている。

三峰山山麓斜面に広がる棚田は、平成 11 年（1999）5月に名勝「姨捨（田毎の月）」として、農耕地の水田では我が国で初めて文化財指定を受けた。さらに、平成 22 年（2010）2月には名勝指定地を含めた棚田地域、水源池・更級川など 64.3ha が重要文化的景観「姨捨の棚田」に選定されている。

また、武水別神社は八幡地区の中央にあり、「八幡宮」、「お八幡さん」の名で親しまれている神社である。八幡地区は奈良時代に「東山道」の支道が通り、平安時代の『和名類聚抄』に記載される信濃国十郡のうち「更級郡小谷郷」に比定される。地区には、「郡」と呼ばれる集落があり、更級郡衙の存在が推定されている奈良時代から続いた更級郡の中心的地域である。平安時代後期以降は、石清水八幡宮（京都府）の荘園となり、その鎮守として八幡宮が勧請されたと推察される。

武水別神社への交通路は、松本方面へ通じる一本松峠を越える街道（通称一本松街道）が武水別神社を通り、稲荷山宿で善光寺街道に合流していた。武水別神社を中心に参拝客のための旅館・料理屋・飲食店などの町屋が軒を並べた門前町として形成された町並みである。

イ 建造物

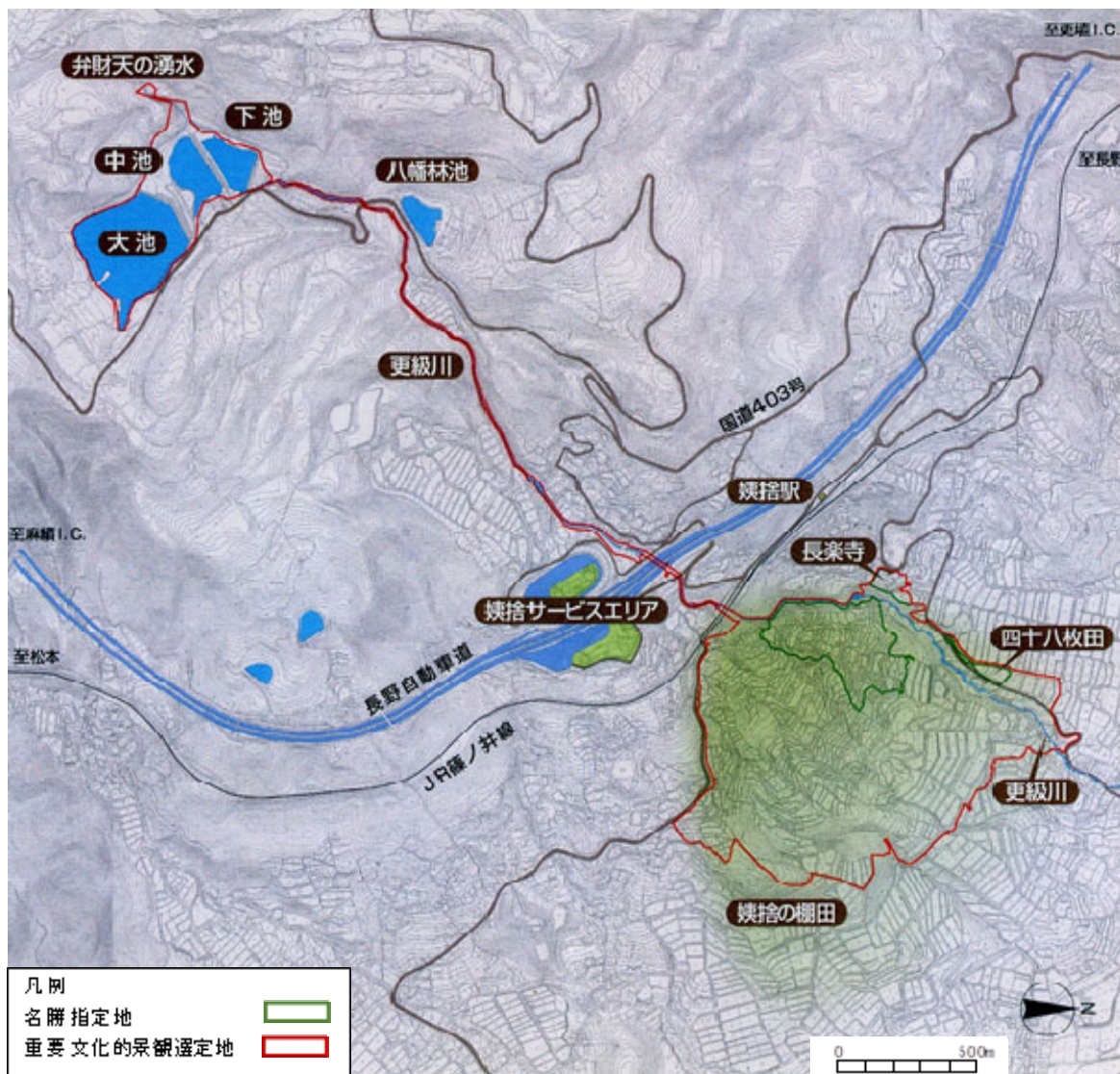
（ア）姨捨（田毎の月）（名勝）、姨捨の棚田（重要文化的景観）

名称「姨捨（田毎の月）」は、聖山高原を背に善光寺平を一望する標高 460mから 560mまでに至る面積約 25ha の景勝地の中にある棚田である。16 世紀頃から形成されていた棚田は、江戸時代から文学・絵画の題材に取り上げられるなど、風致景観の優秀な記念物である。江戸時代後半期に、和歌・俳諧・絵画等を通じて月見の名所として広く知られた千枚田とその展望地点である長楽寺の境内から構成している。

重要文化的景観「姨捨の棚田」は、水源となる大池から更級川へと繋がる水系を軸として、用水や田越の給水方法、「ガニセ」と呼ぶ暗渠による排水方法が網の目のように張り巡らされ、中世末期から近現代に至るまで継続的に営まれてきた農業の土地利用の在り方を示す独特の文化的景観となっている。

（イ）長楽寺（名勝「姨捨（田毎の月）」構成文化財）

名勝「姨捨（田毎の月）」長楽寺地区にある長楽寺の創建については不明であるが、信濃三十三番観音霊場第 14 番札所に数えられ、札所の成立が寛文6年（1666）以前とされることから、長楽寺の建物はそれ以前には整っていたとみられる。現存する建物の建築年代から、松尾芭蕉が訪れた元禄元年（1688）頃の建物はなく、加舎白雄らが明和6年（1769）の刻銘のある「芭蕉翁面影塚」を建てた頃には、現在の観音堂が建っていたとみられる。



名勝「姨捨(田毎の月)」指定地及び重要文化的景観「姨捨の棚田」選定地

a 本堂、庫裡

間口4間半、奥行4間の切妻造柿葺の建物であり、月見殿と接続している。明治31年(1898)の長楽寺所有物明細帳によると、「庫裡 元文以後再建年月不詳」と記されており、当初は庫裡であったことがわかる。寺伝によると、長楽寺の中興は文化11年(1814)とされている。本堂の特徴である低い根太天井を張って中二階を設ける建物の形式や向拝の虹梁の形式から、文化文政期(1804~1829)の建物と推定される(『名勝「姨捨(田毎の月)」記念物保存修理事業－長楽寺本堂・月見殿修理工事報告書－』平成21年(2009))。



長楽寺本堂、月見殿

b 月見殿

本堂、庫裏と1間の通り畳廊下を隔てて接続し、間口2間、奥行6間の入母屋造、茅葺の建物

である。内部は、8畳間3室に襖で仕切られている。建築年代は、虹梁の絵様に幕末の特徴があり、嘉永2年(1849)より少し前と推定されている(『名勝「姨捨(田毎の月)」記念物保存修理事業－長楽寺本堂・月見殿修理工事報告書－』平成21年(2009))。

c 観音堂

間口2間、奥行2間の宝形造茅葺の建物で、本尊聖観世音菩薩像を安置している。虹梁の絵様、肘木の形式から宝暦、明和期(1751～1771)の建築と推定され、虹梁に「文化十二乙亥」の落書きがあり、文化12年(1815)以前の建物であることがわかる(『名勝「姨捨(田毎の月)」記念物保存修理事業－長楽寺月見堂・観音堂修理工事報告書－』平成18年(2006))。



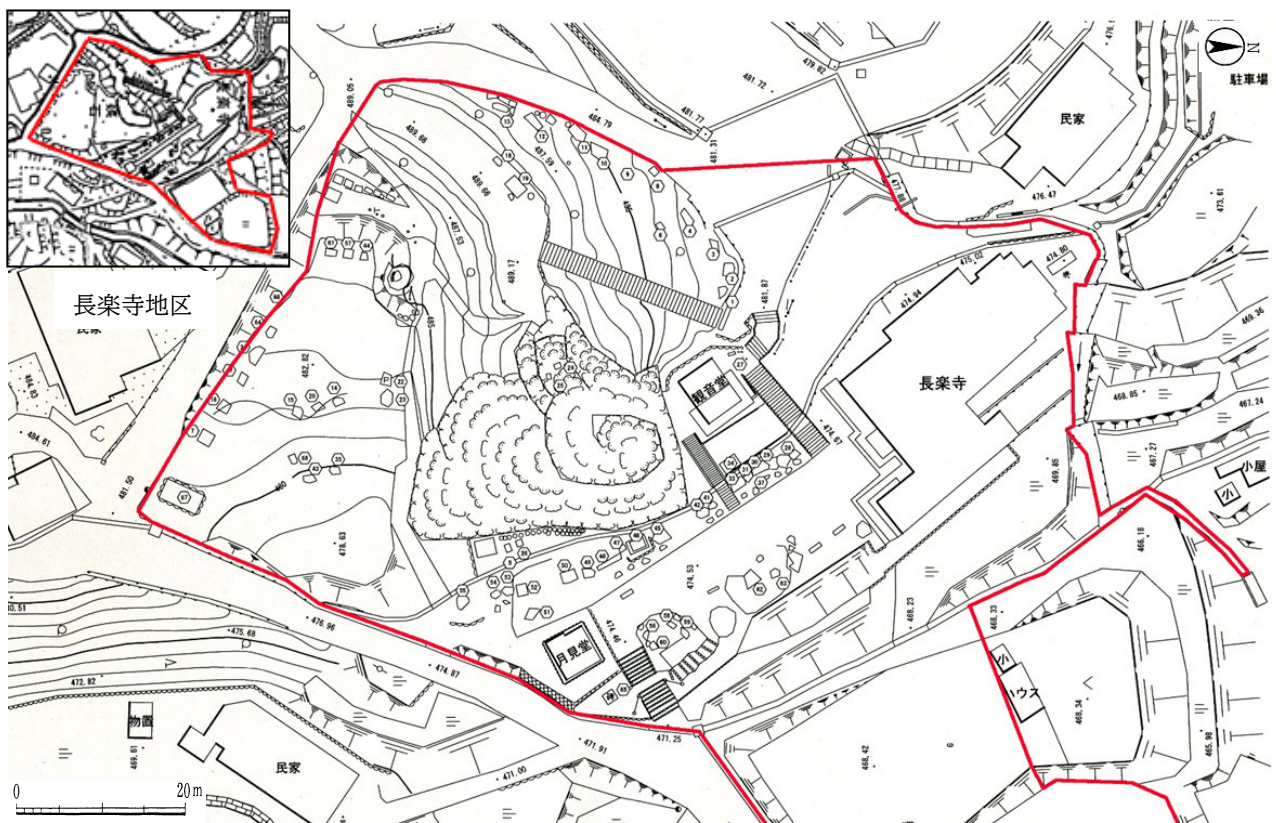
長楽寺観音堂

d 月見堂

間口2間、奥行2間の宝形造茅葺の建物で、月見のできる東・南側を雨戸と障子とし、西側に床の間を設けている。建築年代は、天保期(1830～1842)と推察される(『名勝「姨捨(田毎の月)」記念物保存修理事業－長楽寺月見堂・観音堂修理工事報告書－』平成18年(2006))。



長楽寺月見堂



名勝「姨捨(田毎の月)」長楽寺地区と長楽寺建物配置図(赤線は名勝指定範囲)

(ウ) 武水別神社

武水別神社は、『延喜式神名帳』(延長5年(927))に「武水別神社」と記載されているが、当初から現在地に鎮座していたかは不明である。境内に在る最古の建造物が摂社高良社本殿(16世紀前期)であることから、室町時代後期には現在地に祀られていたことがわかる。社伝によると、安和年間(968~970)に、石清水八幡宮(京都府)から八幡三神を勧請し、中世以降「八幡宮」と呼び、宝暦7年(1757)に社号を「武水別神社」と改めたという。

a 本殿

本殿は、天保13年(1842)の火災で焼失後、嘉永3年(1850)に信州諏訪の立川流宮大工立川和四郎富昌によって建てられた間口5間、奥行6間半の大規模なものである(『信州八幡宮御頭帳』松田宮司家蔵 天保13年(1842)~嘉永3年(1850))。部材や壁面に多数の彫刻が施されていることが特徴である。正面臺段には犬親子・猪、両側面中備には亀に乗る仙人(盧哈仙人)・鶴に乗る仙人(費長房仙人)、妻の虹梁を支える力士、脇障子の桐・鳳凰・雲・麒麟、臺段の牡丹・翡翠・雀・鶉など動植物の彫刻で飾られている。また、境内の社叢は県天然記念物に指定されている。

b 武水別神社摂社高良社本殿(県宝)

境内参道左側に、参道に正面を向けて建っている小建築。建築様式から、室町時代後期、16世紀前期に建てられたと推定されている。

建築の形式は一間社流造の系統であるが、普通の流造にみられる周囲の廻縁や正面の階段は省略され、正面に小さな縁を設けるのみで、いわゆる「見世棚造」に類似した形式となっている。また部分的な構造も省略した形式であり、同時代の本県の神社建築の中で特色ある存在である。

(エ) 武水別神社神官松田邸(市指定有形文化財)

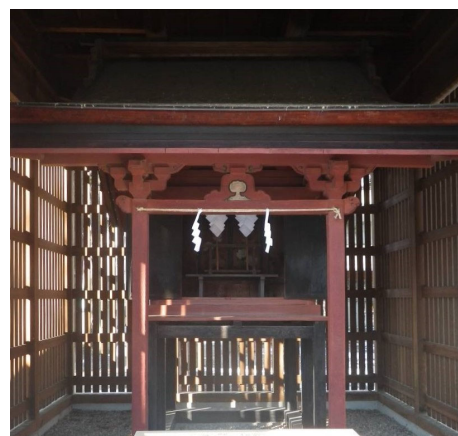
武水別神社の神主は、代々松田家が努めてきた。天正10年(1582)織田信長の死後、上杉景勝は善光寺平を統治し、天正12年(1584)稲荷山城の築城に際し、八幡神領の管理を松田織部祐に命じた。以後、松田氏が代々武



武水別神社境内図



武水別神社本殿、拝殿



覆屋に入っている摂社高良社本殿

水別神社の神主職を継承してきた。松田氏の居館が、武水別神社に隣接する「松田家館跡」で、屋敷地約2,000坪の周囲を堀と土塁で囲んでいる。松田家では、四百数十年にわたり居館を神主屋敷としてきた。現在、堀の一部は道路敷や宅地として埋め立てられ、また土塁の一部は削平されてはいるが、ほぼ戦国時代の面影を残している。保存状態が良く、他に例をみない神主屋敷であることから、県史跡に指定されている。

『日本博覧図第貳拾編』(明治30年(1897))には、「長野縣更級郡八幡村松田穂並邸宅」という銅版画が所載されている。現在残されている建物群は、この銅版画の建物群と一致するため、明治中期以前に建築された建物群であるといえる。これらの建物群を市指定有形文化財に指定している(『更埴市歴史的建造物建築史史料調査報告書(武水別神社神官松田家住宅)』平成9年(1997))。

平成29年(2017)9月に発生した火災により、主屋、料理の間、新座敷が焼失し、斎館、味噌蔵が大きな被害を受けた。市では、焼失した主屋、料理の間の再建を行い、令和5年(2023)3月、古文書を専門に取り扱う博物館施設「武水別神社神官松田邸」(以下、「松田邸」という。)として開館した。



長野縣更級郡八幡村松田穂並邸宅 『日本博覧図第貳拾編』(明治30年(1897))



武水別神社神官松田邸建物配置

a 齋館

文久元年(1861)に再建された間口7間、奥行3間半の寄棟造瓦葺の建物で、^{よせむねづくり}神殿が設けられた儀礼用の建物であり、^{ちゅうしゅうさい}仲秋祭や^{だいどうさい}大頭祭の出達儀式の場として使われていた。^{しゅつたつ}正面に式台玄関を突き出し、^{しき}周囲に下屋を設けている。本来は主屋に接続しており、神官職が行う宗教儀礼と密接に関わっていた建物である。

平成29年(2017)の火災により大きな被害を受けたが、令和元年(2019)に修理・再建が行われた。



松田邸齋館

b 長屋門

間口10間、奥行2間の切妻造、瓦葺の建物であり、低い2階を持つ。表側は大壁に塗り込めていて、格子戸や与力窓を設け、城門のような構えとなっている。平成26年度(2014)に修理を行うとともに、受付、トイレ機能を持たせた整備を行った。部材の形状から幕末頃の建築と考えられる。



松田邸長屋門

c 隠居屋

敷地の東北隅に建てられている。間口、奥行とも4間半の茅葺の曲屋で、周囲に下屋が増築されている。建築様式から江戸時代後期の建築と考えられる。



松田邸隠居屋

d 北の土蔵

間口3間、奥行2間の2階建瓦葺の蔵である。棟札が残っており、明治24年(1891)に味噌蔵として建てられたことがわかる。

e おたや

間口4間、奥行2間の2階建瓦葺の建物である。女性が出産の際に籠った建物であると伝わっている。建築様式から、明治初期の建築と考えられる。



松田邸おたや

f 味噌蔵

間口2間半、奥行2間の2階建瓦葺の蔵であり、1階は内部が2部屋に仕切られている。建築様式から、幕末～明治初期の建築と考えられる。

g 西の土蔵

間口4間、奥行2間の平屋建瓦葺の蔵である。寛政3年(1791)の古図(八幡地区の清水家所蔵)と規模が一致するため、江戸時代後期の建築と考えられる。



御頭帳

h 裏長屋門

間口5間半、奥行1間半の平屋建瓦葺の門であるが、埋められた堀の上に建てられている。平成24年度(2012)に実施した修理工事の際、洋釘を使用して建築されていることが確認されたため、明治時代前期の建築であると考えられる。

(オ) 佐良志奈神社

佐良志奈神社の社号は『延喜式神名帳』に記載が確認できるが、現在地に鎮座していたかは不明である。武水別神社と関係の深い神社であり、宝暦年間(1751～1764)以前は「更級若宮八幡宮」と称しており、以後、佐良志奈神社と社号を改めたという(『武水別神社大頭祭民俗文化財調査報告書』平成22年(2010))。

本殿は三間社流造で、間口3間、奥行2間の建物である。建築時期は嘉永6年(1853)に神社を修復した記録(『佐良志奈神社御修復日記』明治7年(1874)若宮区の豊



佐良志奈神社

城家文書)が残ることから、この頃の建築と考えられる。

ウ 活動

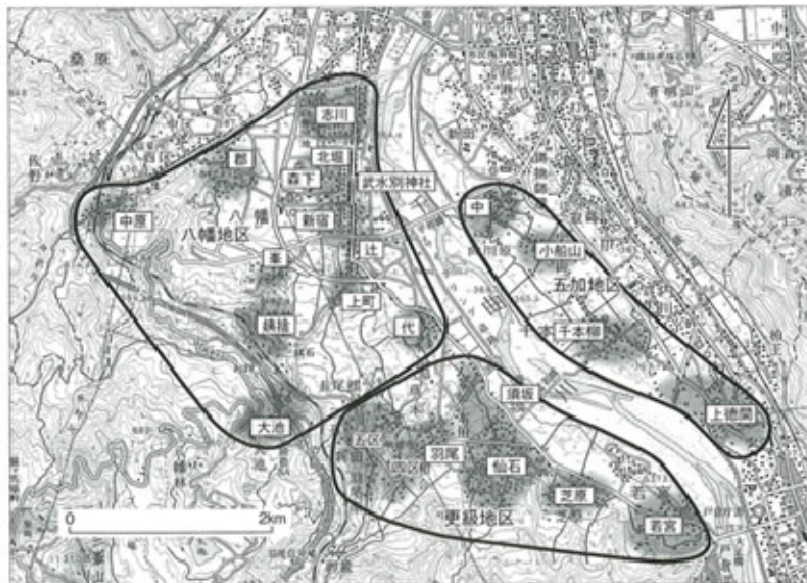
(ア) 武水別神社頭人行事（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）

毎年12月10日～15日にかけて行われる武水別神社の「大頭祭」は、「お練り」とも呼ばれる新嘗祭の行事で、市内外から来るたくさん^{おおいけ}の見物人で賑わっている。その起源は明らかではないが、松田宮司家に伝わる『御頭帳』には、文禄2年(1593)から現在までの頭人の名前が記されているので、四百数十年にわたり引き継がれ行われていることがわかる。

大頭祭を支える武水別神社の氏子は、7郷の3か村 21集落(旧八幡村大池・姨捨・峯・上町・辻・新宿・森下・志川・郡・中原・代、旧更級村若宮・芝原・仙石・羽尾・須坂・三島、旧五加村上徳間・千本柳・小船山・中)の人びとによって構成されている。



大門行列



武水別神社の氏子圏

大頭祭に奉仕する人のことを「頭人」^{とうにん}、「頭殿」^{とうどの}と呼び、頭人は7郷の氏子の中から5人選ばれ、5番頭・4番頭・2番頭・1番頭と順次勤めたうえで、3番頭を勤めることとされていた。最高位である3番頭の頭人を「大頭」と呼ぶことから「大頭祭」と呼ばれる。頭人はそれぞれの集落から行列を作り、松田家斎館まで来て、「出達」の儀式の後、裏道を通り斎森神社^{さいのもり}で練り行列の隊列を整える。祭は、1番頭から順に5番頭までの頭人が、毎日一人ずつ、斎森神社から武水別神社本殿まで練り歩く「大門行列」により神饌を神社に運び、翌晩に神前に供える「御供積み」の行事がみら



御供撒き

れる。

大門行列を「お練り」と呼び、参道の見物人にみかんや日用品(駄菓子・軍手・ティッシュペーパーなどの撒下品)が「御供」として行列の宝船から撒かれ、それを拾う人びとで大変な賑わいとなる。行列には神楽や小学生の鼓笛隊、ソーラン踊りといった出し物がつき、斎森神社や武水別神社境内でにぎやかに踊りを披露している。また、境内には露天商が軒を並べ、賑わっている。

宝船は頭人を務める地区の人々によって作られるものであり、その材料となる材木や杉葉は西部山地に一帯に広がる入会地から調達される。



御供積み



頭人道(各地区から斎森神社までの順路)

(イ) 大池の百八灯 (市指定無形民俗文化財)

大池集落は姨捨の棚田上部にあり、江戸時代には「大池新田村」と呼ばれていた。この大池集落では、「大池の百八灯」と呼ばれる民俗行事が行われている。

徳川家康の養女である小松姫が、天正14年(1586)に上田城主真田昌幸の嫡男である信之のもとに嫁ぐ際に化粧料として大池新田村が与えられたと伝わる。元和6年



街道に並べられた藁束

(1620)に小松姫が逝去し、元和8年(1622)に松代に移封された信之によって小松姫供養のために大英寺が建立され、大池新田村は大英寺領となった。元和9年(1623)頃から大池新田村では「大皓庵」と呼ぶお堂を建てるとともに、8月16日の夕方、送り火を焚いて小松姫を供養するようになったものが大池の百八灯の起源と伝わり、明治初期には現在のような形式となった(『更級埴科地方誌第三卷近世編下』(昭和56年(1981)「更級埴科地方誌刊行会」)。



百八灯

百八灯は、更級川をはさんだ大池集落の対岸の「大道」と呼ぶ一本松峠に通じる街道沿いに、2mほどの間隔にわら束を108個並べ、夕方、上手から火をつけ、送り火とするものである。点火は地区の子どもたちが中心となり、大きな声を響かせながら、わら束に火をつけている様子がみられる。

大皓庵は昭和29年(1954)に取り壊され、地区の公民館に建替えられたが、館内に小松姫を祀る仏壇が設けられている。

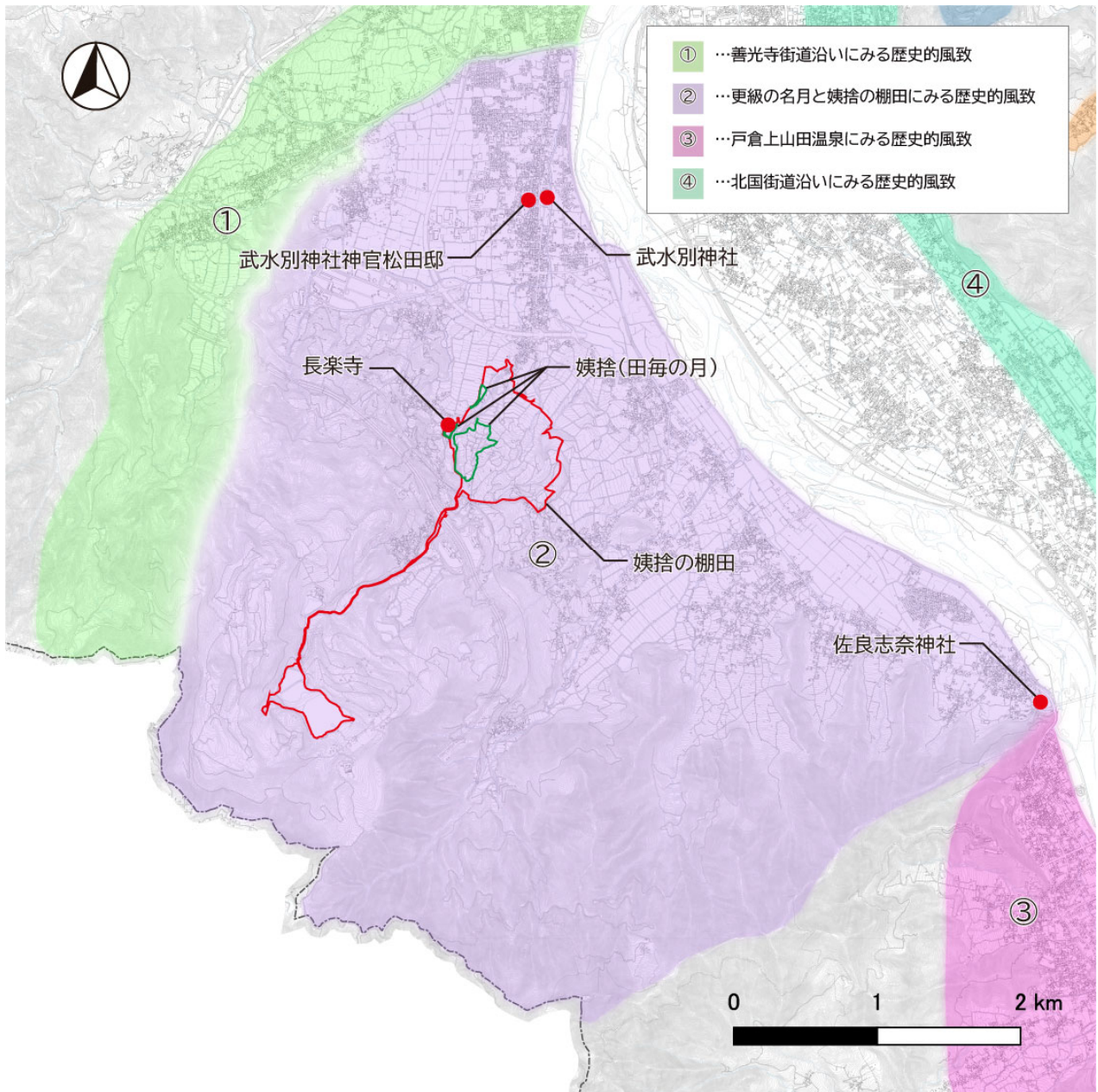
エ まとめ

更級地区や八幡地区は、古く平安時代から京の都でも知られた月の名所であった。中世以降に耕作が始まったとみられる姨捨の棚田は、江戸時代にさらに棚田が拡大するとともに、長楽寺や棚田が観月の名所となり、多くの文学作品や絵画が創作された。

更級の名月や姨捨の棚田一帯は、古くから観月の地とされ現在に引き継がれている。月や棚田をとおして歴史的風致が形成された棚田景観は、日本遺産の主要な構成文化財でもあり、先人の遺徳を現在に伝える地域となっている。また長楽寺周辺では仲秋の名月の頃、「信州さらしな・おばすて観月祭」が開催されており、令和7年(2025)は42回目を数える。観月祭では、俳句大会や満月ライブ、棚田ウォーク、長楽寺のライトアップなど、多彩なイベントが行われ、初秋の風物詩となっている。

武水別神社の大頭祭は、『御頭帳』で明らかなように文禄2年(1593)から現在まで、一度も中断することなく四百数十年も引き継がれてきた伝統行事である。また、この行事には、八幡・更級・五加地区の人びとが関わる、秋の収穫が終わり厳しい冬の訪れを告げる風物詩となっている。

棚田を背景とした人々の活動とその周辺に残されている歴史的建造物を中心に催行される伝統行事は、地域の人々の生活に深く根差した特徴を備える歴史的風致となっている。



更級の名月と姨捨の棚田にみる歴史的風致範囲

(3) 戸倉上山田温泉にみる歴史的風致

ア はじめに

戸倉上山田温泉は、明治元年(1868)に千曲川左岸の河原に温泉が発見され、明治 26 年(1893)に戸倉温泉、明治 36 年(1903)に上山田温泉が開湯された。その後、千曲川右岸に新戸倉温泉が開湯された。これらの温泉を総称して「戸倉上山田温泉」と呼んでいる。

戸倉上山田温泉の最盛期は昭和 48 年(1973)頃で、宿泊者数が年間 100 万人ほどあり、長野県内では、上諏訪温泉(諏訪市)や浅間温泉(松本市)、湯田中温泉(山ノ内町)などとともに団体旅行で賑わいをみせていた。旅館やホテルの多くは、その頃に建替えられた建物が多く、昭和のイメージが残る温泉街となっている。

イ 建造物

(ア) 智識寺大御堂(重要文化財)

温泉街から徒歩 20 分ほどのところにある智識寺は、真言宗の寺院で、地元や周辺地域の人びとが参拝に訪れる。この本堂は重要文化財に指定され、「大御堂」と呼ばれている。間口3間、奥行4間の寄棟造、妻入の茅葺のお堂である。屋根は正面に化粧垂木を配置しているが、側面及び背面は力垂木のみとなっている。正面1間を吹き放ち、後ろの方3間を内陣とし、周囲に切目縁を廻し、擬宝珠高欄を付けている。建築年代は、室町時代末と考えられている。寺伝では、天文 10 年(1541)の再建という。当初は冠着山の麓、曾根堂にあり、天文年間(1532-1554)に現在地に移築されたというが、慶長 14 年(1609)に現在地に移ったともいう。慶長 14 年(1609)の棟札が、昭和 28 年(1953)の修理の際に見つかっている。



智識寺大御堂

大御堂には、像高3mもの木造十一面観音立像が安置されている。頭部・体軀とも、一木造で、わずかに両手肘外側に薄く矧木し、また両手首を矧付けているのみである。頂上仏・化仏も頭部の共木から彫り出した完全な一木造りで、平安時代後期の作と考えられ、重要文化財に指定されている。

また智識寺境内周辺は、「智識の杜公園」として整備され、あじさい寺として、あじさいの花のシーズンには参拝者が多い。

(イ) 笹屋ホテル別荘(登録有形文化財)

昭和7年(1932)に建てられた建物で、帝国ホテル設計者のフランク・ロイド・ライトの弟子である建築家遠藤新の設計による木造和風旅館建築である。畳敷きの座敷と一段下がった椅子置きひらまんの広縁から庭に至る客室構成は、後の旅館建築に大きな影響を与えた。作家の志賀直哉が逗留し小説「豊年蟲」を執筆した部屋は「豊年虫」と名付けられ、現在も客室として使用されている。



笹屋ホテル別荘 客室

ウ 活動

(ア) 戸倉上山田温泉夏祭り

戸倉上山田温泉夏祭りは、毎年7月中旬の2日間開催される水天宮^{すいてんぐう}の祭である。明治 36 年(1903)に開湯され発展した上山田温泉は、千曲川の氾濫により幾たびもの水害に見舞われた。温泉街の人びとは、水神の怒りを鎮める祭として大正 13 年(1924)に、水天宮を千曲川の堤防上から温泉街の中心に分祀し、水天宮祭を行ったことが戸倉上山田温泉夏祭りの由来であり、昭和 11 年(1936)に撮影された写真が残っている。

昭和3年(1928)、昭和天皇御即位を祝して勇獅子^{いさみじし}が温泉街を練り歩き、昭和 49 年(1974)には御神体神輿^{ごしんたい}が制作され、勇獅子とともに温泉街を練り歩くようになった。

その後、彦神輿^{ひこ}と姫神輿^{ひめ}、さらに女性が担ぐ芸妓連神輿^{げいぎれん}と華神輿^{はな}(雅・葵)^{みやび あおい}2基が加わり、現在5基の神輿と勇獅子が練り歩く祭となっている。祭は、住民有志が中心となり、信州千曲観光局・旅館組合・上山田地区の力石・三本木・新山・八坂・温泉中央自治会などで構成する実行委員会により行われている。

祭1日目は水天宮での神事から始まり、子ども神輿や上山田地区の各自治会による手作りの山車十数基ほどが温泉街を練り歩く様子がみられる。夕刻、厳かな雰囲気の中、松明行列を先頭に御神体神輿が続き、水天宮前で練り込みを行った後、安置所へ神輿を安置して第1日目の祭が終了する。

第2日目は本練りとなり、勇獅子はお囃子^{はやし}さんと芸妓^{げい}さんを乗せた山車を引き、掛け声とともに温泉街を練り歩く。巡行路の各所に設けられた神酒所^{かみじょう}や旅館の前で立ち止まり、山車の芸妓さんが手踊りを披露する。神輿は、男性が担ぐ彦神輿と姫神輿、女性が担ぐ華神輿の計4基が勇獅子の後に続き、終番では彦神輿と姫神輿の双方に女性が4名ずつ乗った神輿の巡行で最高潮となり、神輿が会所に練り込んだところで祭が終わる。

(イ) 千曲川納涼煙火大会

令和 7 年度(2025)の開催で 94 回を重ねる納涼煙火大会が、毎年8月7日に開催されている。昭和 47 年(1972)の旧上山田町広報誌に納涼煙火大会の記事を確認することができる。戸倉上



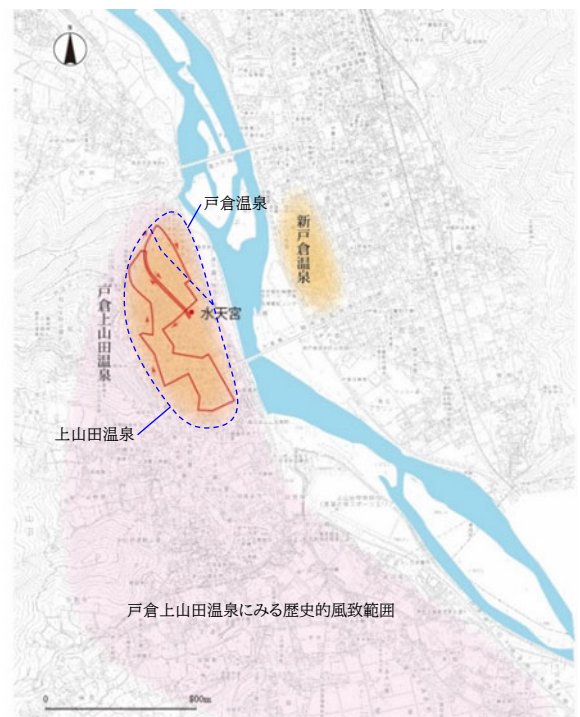
夏祭りの様子(昭和 11 年(1936))



勇獅子



華神輿



戸倉上山田温泉夏祭り範囲

山田温泉街を正面とするように、温泉街前の千曲川河原で行われ、市内外からの大勢の見物客は堤防上や河川敷から花火を見る。この辺りは、千曲川を挟み兩岸に山が迫っているので、打ち上げの音が山々にこだまし、ひととき大きく響き迫力のある花火である。



千曲川納涼煙火大会

(ウ) 上山田太々神楽（市指定無形文化財）

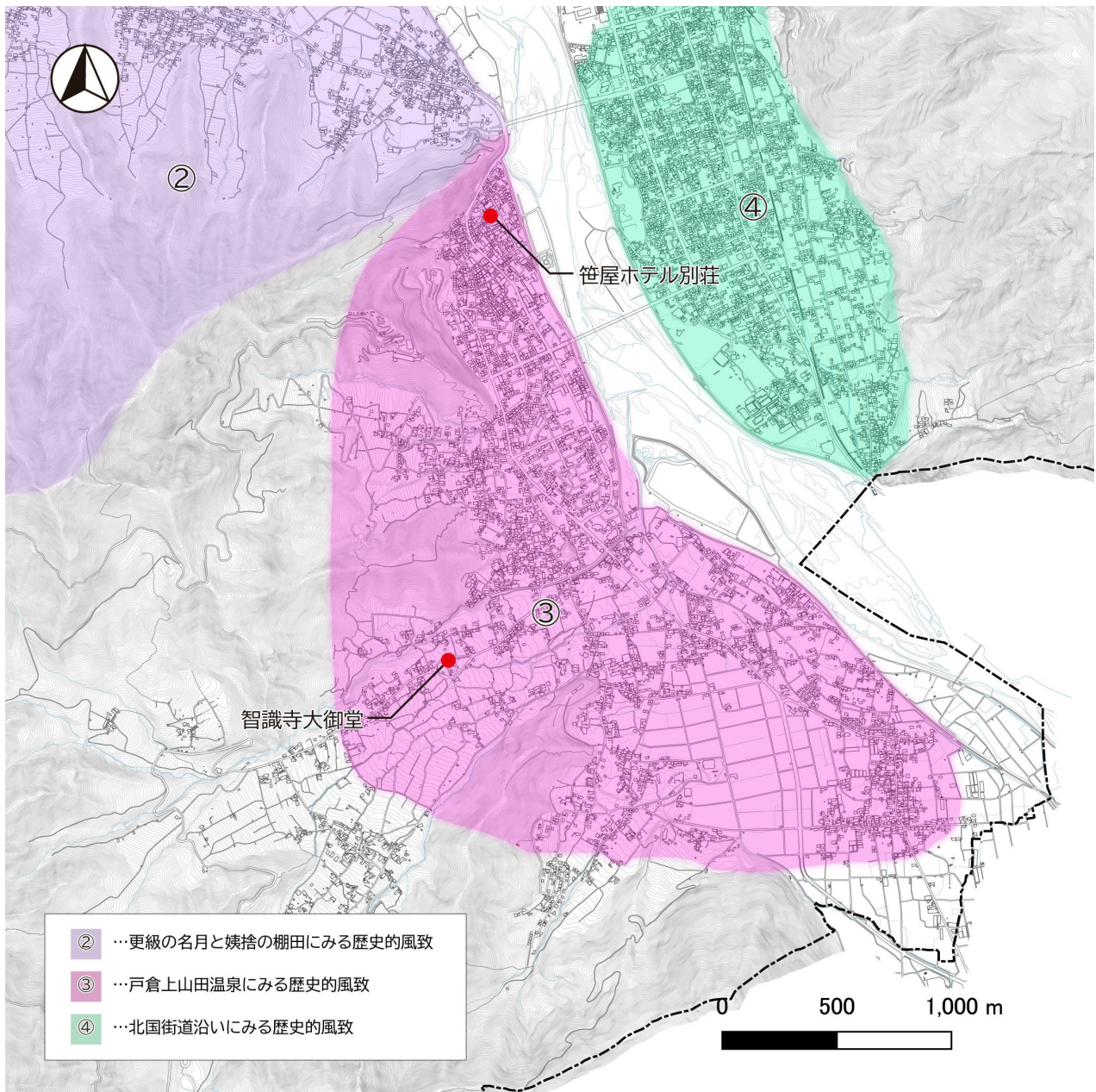
温泉夏祭りや4月の智識寺十一面観音の春祭り、9月に行われる波間科神社での秋祭り、新築の家やお祝い事などといった上山田地区の行事では、上山田太々神楽が披露されている。この神楽も伊勢太々神楽系の獅子舞であり、中原の獅子舞神楽が上山田地区（力石・八坂・新山・城腰集落）に伝承され、地区内で広く演じられてきたものである。神楽は二人一組で演じられる雌獅子舞であり、太鼓・笛・鉦の音に合わせて演じられる。一時衰退していたが、昭和46年(1971)に上山田神楽保存会が結成され、農村における民俗芸能を現在に継承している。



上山田太々神楽

エ まとめ

戸倉上山田温泉は、開湯 120 年を超える歴史を有する長野県屈指の規模を誇る温泉街である。千曲川の河原に開湯された温泉旅館を中心に温泉街が展開し、中には後の旅館建築に大きな影響を与えた和風旅館建築もある。また、たび重なる千曲川の水害から温泉街を守るために祀った水天宮の祭りとして始まった水天宮祭は発展し、戸倉上山田温泉夏祭りとして賑わい、河川敷での納涼煙火大会とともに、夏の風物詩となっている。さらに、重要文化財の智識寺大御堂や十一面観音立像と、地域に伝承される太々御神楽は、地域の人びとによって守り伝えられてきた歴史的風致を形成している。



戸倉上山田温泉にみる歴史的風致範囲

(4) 北国街道沿いにみる歴史的風致

ア はじめに

北国街道は、五街道の一つである中山道^{なかせんどう}と北陸道^{しなの おいわけしゆく}を結ぶ街道で、信濃追分宿(軽井沢町)で中山道と分かれ、越後国出雲崎宿(新潟県出雲崎町)までの街道である。佐渡の金銀が江戸に運ばれたほか、加賀前田藩をはじめとする北陸方面の諸大名の参勤交代、関東、信越の人びとの物資の流通路などとして使われ、越後や北陸と江戸を結ぶ主要な街道の一つであった。

市内では、千曲川右岸の山裾を南北に通じ、戸倉宿(上戸倉宿・下戸倉宿)、矢代宿を経由して千曲川を矢代の渡しで渡り、篠ノ井追分宿(長野市篠ノ井)で善光寺街道と合流していた。

戸倉村は江戸時代初期には一つの村であり、慶長7年(1602)の検地帳には「戸倉村」の記述が残されているが、延宝7年(1679)の「御高帳」では、上戸倉村、下戸倉村に分かれていた。戸倉村の分村に伴い、戸倉宿も上戸倉宿と下戸倉宿に分かれたが、一つの宿として機能していた。矢代宿は北国街道とその支道で松代に向かう北国脇街道(谷街道)の分岐点に位置する。屋(矢)代の地名は平安時代から伝わっているが、北国街道の成立に伴い街道筋に集落を集めて作られたものが、矢代宿の街なみであるという。「屋代」から「矢代」に字を変えたのは寛文年間(1661~1673)とされ、明治5年(1872)に屋代に復している。

イ 建造物

(ア) 水上布奈山神社本殿(重要文化財)

水上布奈山神社は、下戸倉宿が設置された際に、その鎮守として諏訪大社より建御名方神を勧請して創建されたと伝えられている。現在の本殿は、寛政元年(1789)に諏訪の大隅流宮大工である柴宮長左衛門矩重によって建替えられたものである。

本殿は間口10尺(3.03m)の一間社流造、正面に軒唐破風^{のきから}を付け、屋根を柿で葺く。この本殿の特徴は、各部に多用された彫刻で、ケヤキの白木に施した彫刻は彩色されず、数が多い。虹梁に「上り龍・下り龍」を丸彫りし、また脇障子上の束にも「上り龍・下り龍」を彫刻している。正面虹梁上に「松に鶴」、唐破風内に「鳳凰」、側面小壁に「波に亀」、「飛龍」、脇障子に「竹林の七賢人」、正面両脇に「仙人像」、縁下に「唐獅子」、「蘇鉄に兎」などの彫刻を施している。これらの彫刻は精巧に仕上げられ、時代と流派の傾向をよくあらわしており、江戸時代後期の建築として貴重であるため、昭和61(1986)重要文化財に指定された。

近年では、昭和59年(1984)に覆屋の建替え、平成19・20年(2007・08)に本殿の修理が行われた。



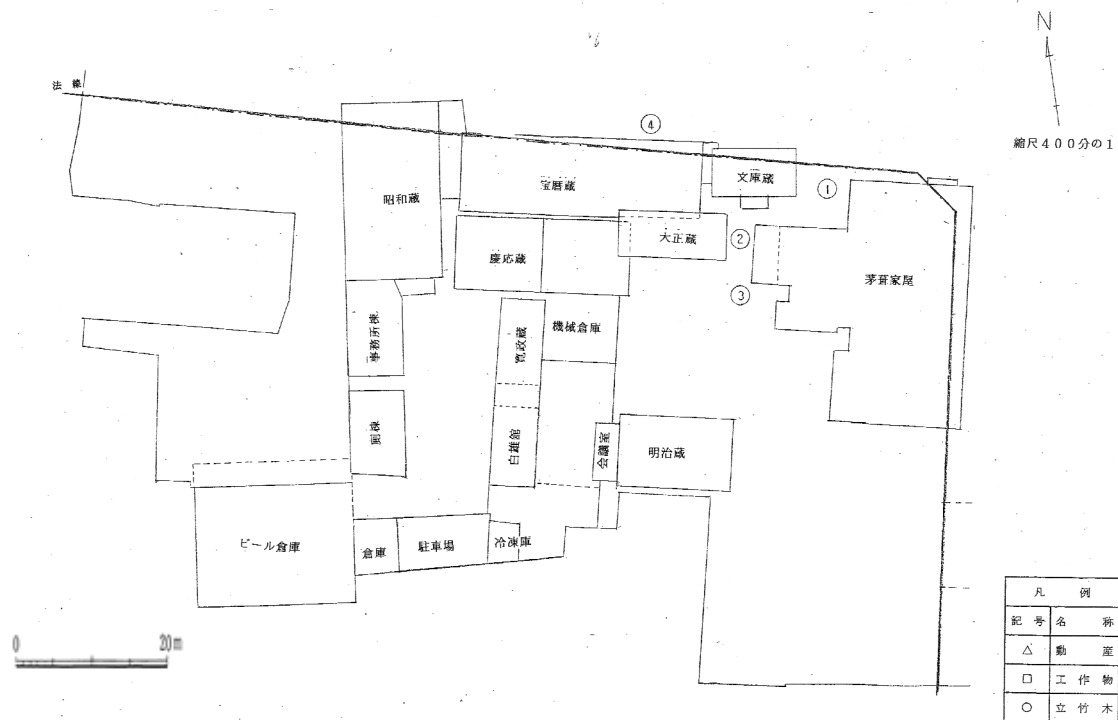
水上布奈山神社本殿

(イ) 坂井銘醸(登録有形文化財) 江戸時代中期～昭和初期

下戸倉宿の坂井家は宿の中心部で「造酒屋」を経営し、下戸倉村の名主や年寄りを勤めてきた。現在はこの場所での酒造りは行われていないが、街道に面して建つ主屋は、飲食店「蕎麦料理処 萱」として活用されているほか、酒蔵には関係の深い松尾芭蕉門下の俳人である加舎白雄や大正時代の美人画で著名な竹久夢二の資料が展示されている。

近年では、令和元年(2019)東日本台風災害により文庫蔵などで壁が剥落するなどの被害

を受けたが、修理が行われた。



坂井銘醸建物配置

a 主屋

北国街道に面した間口20間、奥行12間半の曲屋であり、屋根は茅葺である。坂井家に伝わる古文書によると、弘化4年(1847)に発生した善光寺地震で倒壊を免れた記録が残っていることから、建築年代はこれ以前と考えられる。

主屋中央には、間口2間の式台が設けられており、名主家としての権威と格式を示した応接・接待用の機能を持たせたものと考えられる。

現在は、基本構造を残しながら内部を改装し、事務所・飲食店・売店として活用されている。



坂井銘醸主屋

b 酒蔵群

敷地内には、その時々々の生業の必要性に応じて蔵が順次建てられており、7棟が現存している。酒蔵には建築時の元号が付されており、宝暦蔵(1751~1764)から昭和初期(1926~1936)にかけて建築されたことがわかる。



坂井銘醸酒蔵群

(ウ) 瀧澤家住宅(登録有形文化財)

瀧澤家は、享保年間(1716~1736)に上戸倉宿の福井村の組頭を勤めていた記録が残されている。

主屋は間口12間、奥行6間半の寄棟造、茅葺の建物で、後方に張り出しがあるが、この張り出しは江戸時代後期の増築と考えられている。大黒柱の意識がないなど、江戸時代中期の様式を示しており、建築年代は18世紀前半と考えられている。

長屋門は間口11間半、奥行2間半の建物で、屋根は茅葺、左側を切妻造、右側の寄棟造としている。江戸時代後期の建築と考えられている。

土蔵は間口5間、奥行2間半の建物で、置屋根形式の切妻造、瓦葺である。祈祷札が残されており、宝暦10年(1760)の建築である。



瀧澤家住宅

(エ) 寿高原食品四階倉庫（登録有形文化財）

しなの鉄道戸倉駅前に建つ間口16間、奥行6間、切妻造、土蔵建瓦葺の建物である。外壁は漆喰塗大壁で、軒は平らに塗り込めている。棟札によると、大正4年(1915)の建築であることがわかる。窓は間口方向に1階が16か所、2階～4階が20か所設けられている。

倉庫の形式としては蔵倉庫である多窓式のものを継承しているが、本建物は当初から商品倉庫として建築されたことに特徴がある。



寿高原食品四階倉庫

(オ) 屋代小学校旧本館（市指定有形文化財）

明治21年(1888)に建築された間口11間、奥行7間、2階建瓦葺の学校建築である。正面の車寄を三角破風とし、窓や扉は緩いアーチ形状としている。外壁は下見板張としており、明治期の学校建築に見られる擬洋風建築となっている。昭和52年(1977)まで屋代小学校校舎として使用されていたが、昭和53年(1978)、屋代小学校改築に伴い現在地に曳家された。

旧本館建設には、総額9,998円(当時)余りがかかり、このうち6,000円ほどが地域住民の寄付により賄われたという(『沿革史 屋代学校』昭和38年(1963))。



屋代小学校旧本館

(カ) 寂蒔水除土堤

千曲川の氾濫から田畑や家屋を守るため、元禄6年(1693)に寂蒔、鋳物師屋、打沢、小島の4か村によって築かれたものであり(寂蒔地区の「宮坂家文書」嘉永3年(1850))、北国街道と交差する付近に部分的に現存している。街道と土堤が交差する箇所は、非常時には土のうや



寂蒔水除土堤

石で道の部分を埋め立て、ひと続きの土堤として機能させ、水害を防いだという。

(キ) 須須岐水神社本殿

北国街道矢代宿で街道が鍵の手に曲がるところに須須岐水神社がある。江戸時代には「矢代山王宮」とも呼ばれ、日吉山王を祀っている。現存する本殿は、天保14年(1843)の矢代宿の火災により焼失し、嘉永5年(1852)に再建された。再建にあたっては、武水別神社の建築に当たっていた諏訪の立川流宮大工立川和四郎富昌に依頼し、総費用500両ほどを要したとの記録が残る(屋代区有文書 安政4年(1857))。

当時の神社建築を代表する諏訪の宮大工、大隅流と立川流という二つの流派の神社建築が、北国街道の隣り合う宿場に建てられたのである。



須須岐水神社本殿



本殿の前に建つ2本の御柱

ウ 活動

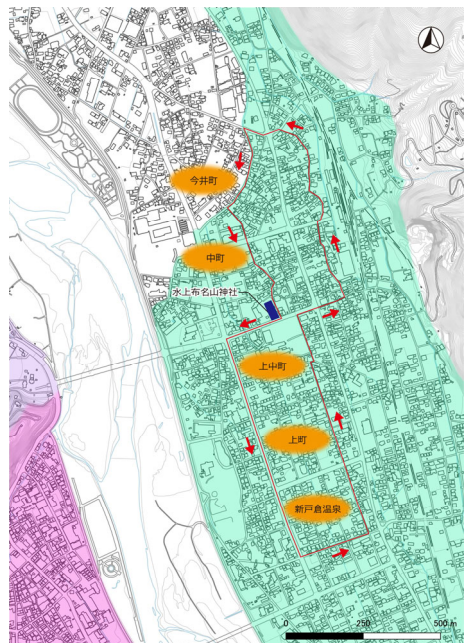
(ア) 水上布奈山神社の御柱祭(市指定無形民俗文化財)

水上布奈山神社の御柱祭は、諏訪大社の御柱祭と同様に数えて7年に1度、干支の寅と申の年に行われている。天保13年(1842)の御柱祭の記録が残っており、少なくとも180年以上続く伝統行事である。直近では令和4年(2022)の開催であったが、新型コロナウイルス感染症による影響を避けるため、令和5年(2023)に開催された。

祭は、下戸倉宿を構成している今井町・中町・上中町・上町・新戸倉温泉の五地区が順番に奉納している。拝殿の両脇に立てられる一之柱と二之柱は、戸倉地区の山林から赤松の大木を切り出すもので、氏子の曳く綱や木遣唄で奉置所まで曳行する「山出し」と、地区内を曳行し神社まで行われる「里曳き」、曳行した御柱を立てる「建御柱」で構成されている。里曳きでは、御柱とともに木遣、3艘の舟、神楽、子どもや踊り連などの行列が賑やかに町中を練り歩く。建御柱では、柱が立ち上がるにつれ、境内に勇壮な掛け声が響き渡る。



御柱の曳行(里曳き)



御柱の曳行行程

(イ) 須須岐水神社の春祭り

須須岐水神社の春祭り、屋代地区の10町の氏子により執り行われている。昭和35年(1960)までは、「一つ物」という祭であったが、現在では春祭りと名称を変え、現在に引き継がれている。5月3日の春祭りでは神輿の町内巡行、

山車の曳行、子ども神輿の巡行が賑やかに行われている。

江戸時代までは、須須岐水神社において雨宮坐日吉神社あめのみやにいます ひよしじんの祭礼に須須岐水神社の神輿の渡御が行われていた。

これは、須須岐水神社も雨宮坐日吉神社とともに山王社を勧請しており関係が深く、両社の大祭は同じ日に行われていたことによるものである。明治5年(1872)に神輿の渡御は廃止されたが、「一つ物」と呼ぶ行列が屋代の町内を練り歩いていた。一つ物は、須須岐水神社の神輿の渡御行列の中心を成すもので、山鳥の尾羽を笠に挿し馬に乗った童子の前後を武者や従者を従えた行列のことである。春祭りで拝殿の前に飾られる「一つ物」の道具は、須須岐水神社の大祭が引き継がれていることにちなんだものである。



一つ物行列 昭和10年(1935)

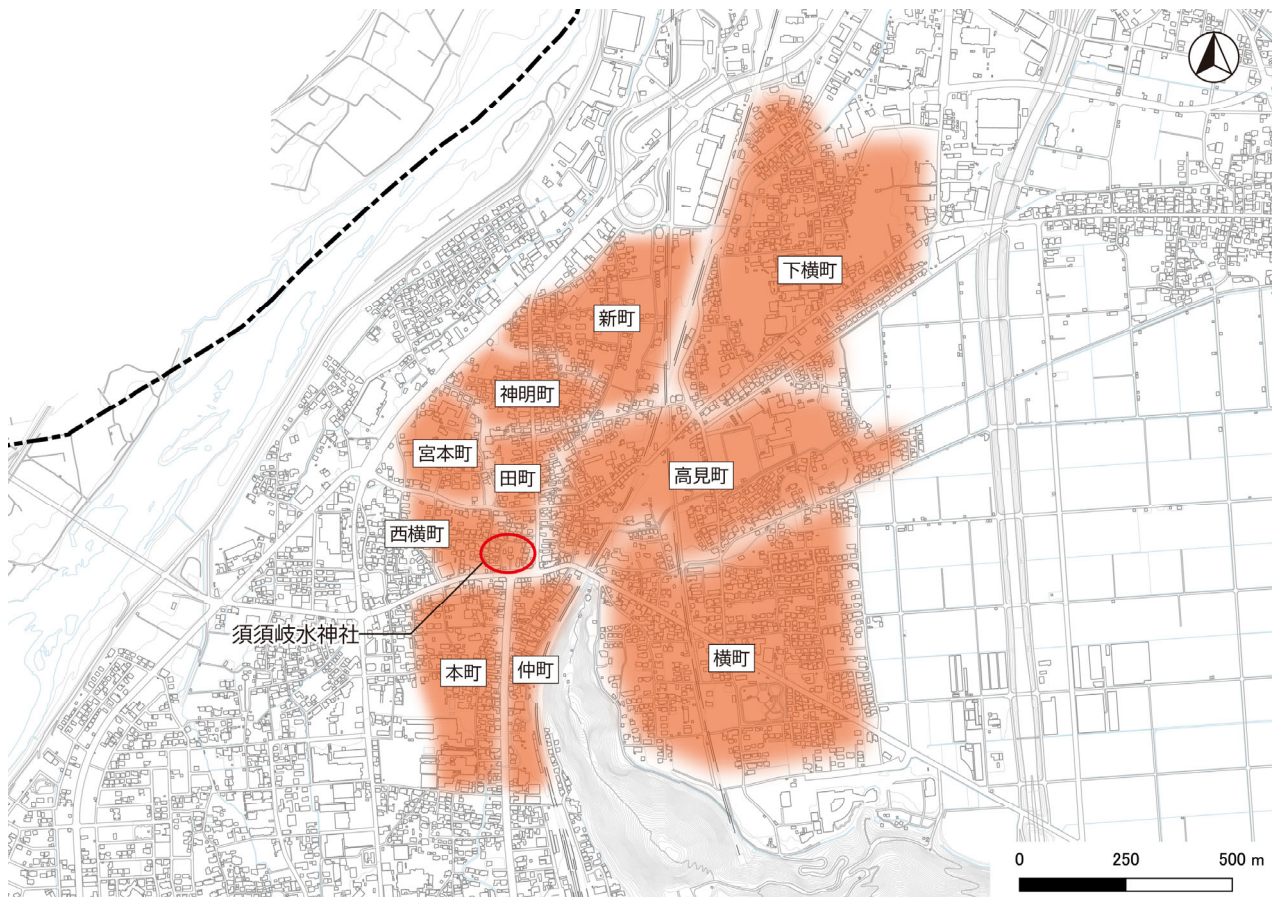


神輿の巡行

(ウ) 寂蒔水除土堤の愛護活動

水除土堤は、地区を水害から守るために設置されたものであるが、千曲川の整備が進むにつれ、その役割を終えた。昭和47年(1972)、寂蒔区から地区を水害から守ってきた記念物である土堤整備の要望が出された。市では、歴史遺産として保存を図るため、昭和50年(1975)小公園として整備を行った。

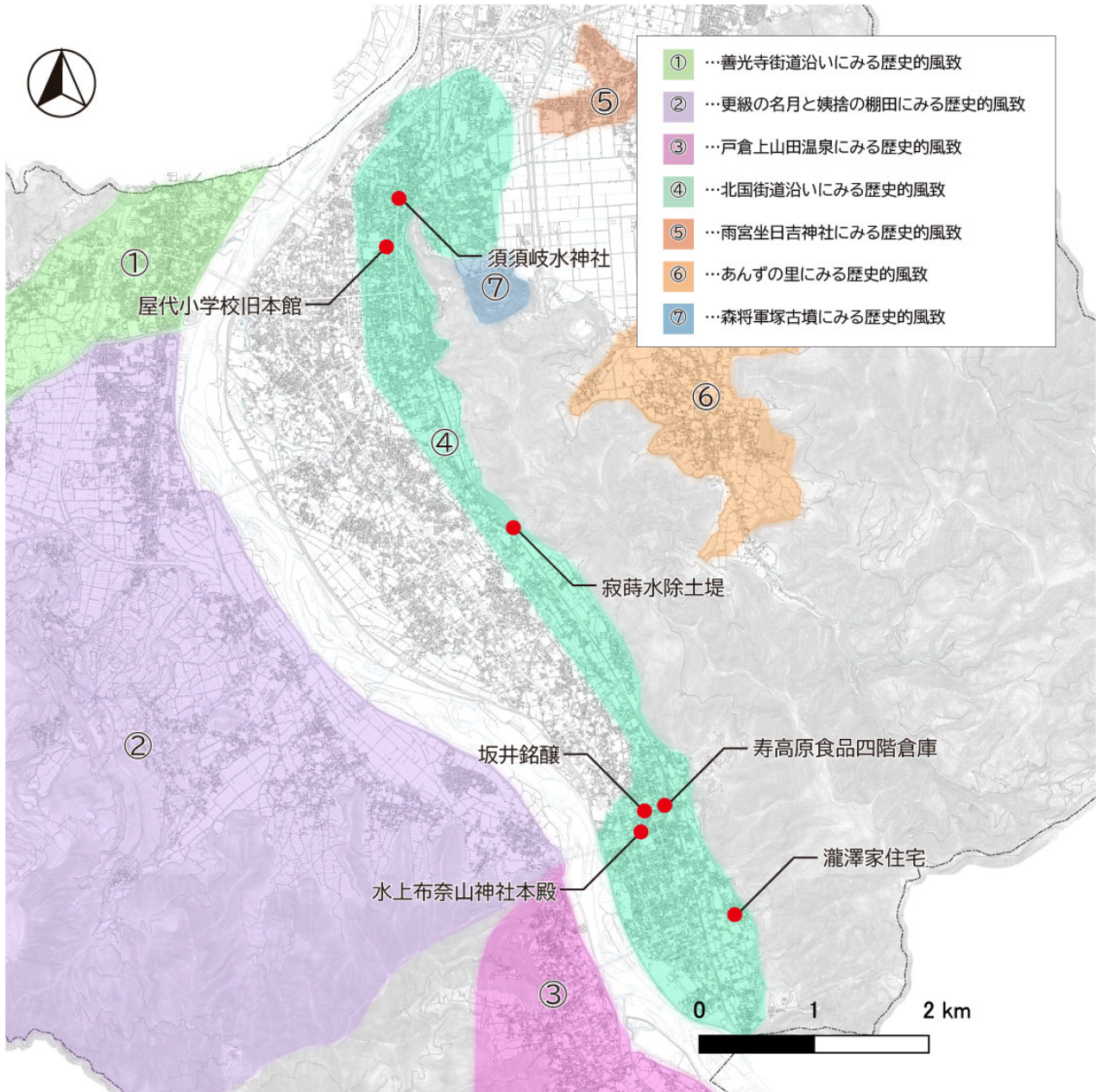
寂蒔区では公園の管理を行っており、桜の季節には地域住民の憩いの場となっている。



須須岐水神社氏子圏

エ まとめ

北国街道の隣り合う宿場に、江戸時代、信州諏訪を代表する二つの宮大工である大隅流と立川流の神社建築があたかも競い合うように建てられた。神社を中心として街道に面した宿場町には、神社の特徴的な建造物とともに伝統行事を核とした人びとの活動が現在に引き継がれている。また、明治維新後の文明開化を象徴する学校建築が人びとの努力により建築されており、特徴的な歴史的風致を形成している。



北国街道沿いにみる歴史的風致範囲

（5）^{あめのみやにいます ひ よし}雨宮坐日吉神社にみる歴史的風致

ア はじめに

雨宮地区は千曲川右岸に形成された自然堤防上に営まれた集落で、北国街道の支道で矢代宿から分岐した北国脇街道^{まつしろみち}（松代道）沿いに位置している。地区周辺は屋代遺跡群となっており、原始、古代から中世に至る埋蔵文化財が濃密に残されている。近年の発掘調査により、埴科郡衙^{はにしなぐんが}や初期信濃国府の存在が推定されている。

雨宮坐日吉神社は氏子である地域住民によって守られており、神社の例大祭は「雨宮の神事芸能」（御神事）として重要無形民俗文化財に指定されている。

イ 建造物

（ア）雨宮坐日吉神社

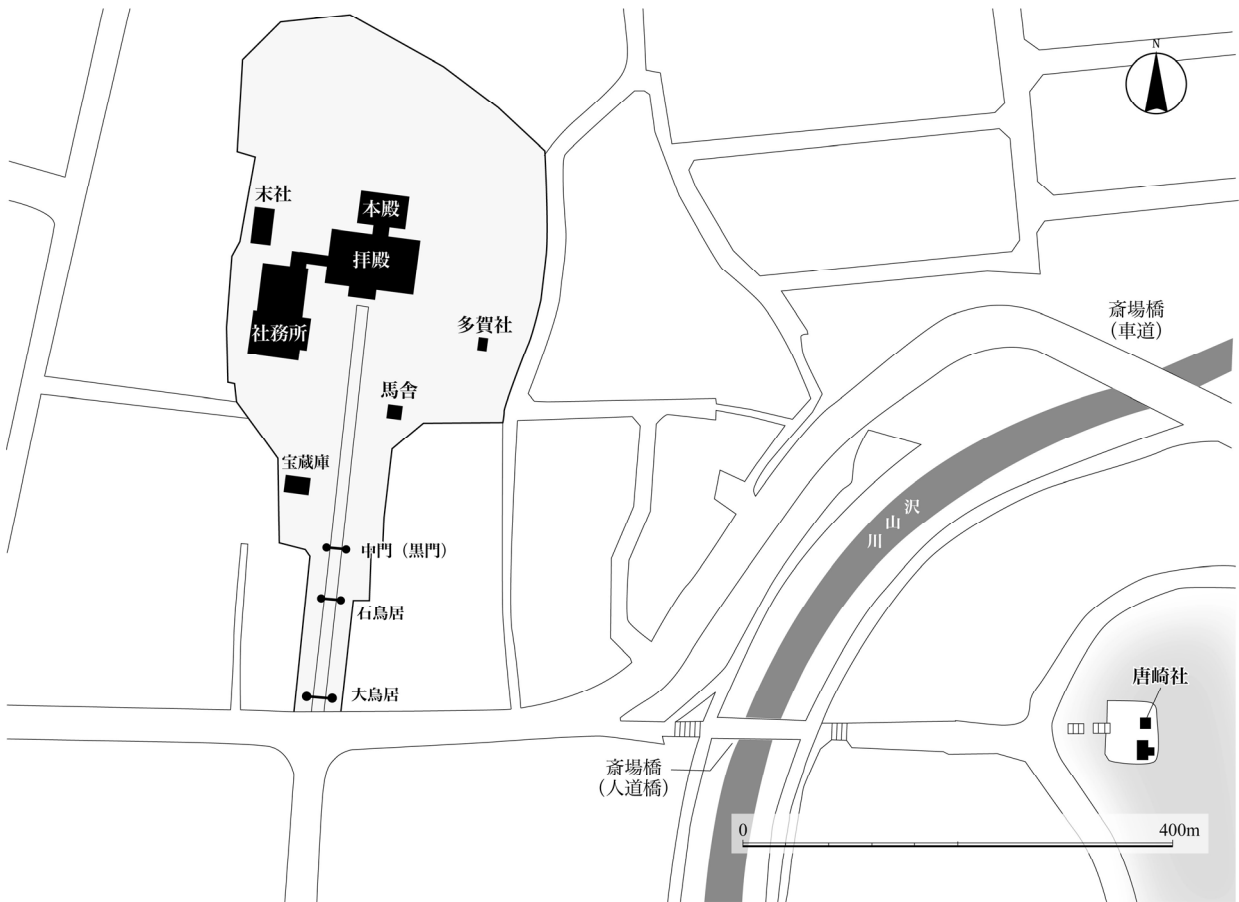
雨宮坐日吉神社は、古くは「雨宮山王宮」^{あめのみやさんのうぐう}と呼ばれ、祭神を日吉大社（滋賀県）より勧請していたが、明治元年（1868）に現在の「雨宮坐日吉神社」と改められた。

本殿は間口2間3尺、奥行3間の流造で、拝殿は間口7間、奥行4間の入母屋造となっている。近年の調査で、享保8年（1723）に本殿修理を行った際の棟札が発見され、本殿の建築はこれ以前に遡ることが明らかとなった。



本殿と拝殿

通りに面した大鳥居を入った境内には、「黒門」と呼ばれる中門があり、拝殿へと続いている。中門の左手に宝蔵庫があり、神輿をはじめ祭の衣装や道具類が保管されている。



雨宮坐日吉神社境内とその周辺

ウ 活動

(ア) 雨宮の神事芸能（雨宮の御神事）（重要無形民俗文化財）

雨宮の神事芸能は、「雨宮の御神事」「獅子踊り」とも呼ばれる雨宮坐日吉神社の例大祭行事である。御神事の起源は明確ではないが、江戸時代に松代城まで出向き、文政年間(1818～29)に御神事踊りを松代藩主に披露している絵図が残されていることから、200年以上の歴史を持つものである。

江戸時代以前は雨宮村だけでなく、近隣の森・倉科・生萱・土口・屋代の各村々の合同の祭であったが、明治5年(1872)に屋代村が脱退、明治22年(1889)の合併による雨宮縣村成立を契機として森・倉科・生萱・土口の各村が脱退し、翌明治23年(1890)から雨宮地区単独で行われるようになった。雨宮地区においても昭和47年(1972)までは毎年4月29日に行ってきたが、以後3年ごとに行わ



町太鼓



獅子踊り

れるようになり、現在に至っている。

祭は、社殿での遷座式の神事後、「町太鼓」と呼ぶ触れ太鼓の合図で祭り装束に身を包んだ諸役が社前に参集して始まる。中心となる「御行司」は、烏帽子をかぶり猿田彦の面をつけ、高下駄を履き、大太刀・大団扇を持ち社殿を背に立つ。御行司の大団扇の合図で、「朝踊り」「城踊り」と呼ぶ御神事踊りが行われる。笛・太鼓・歌に合わせて、六大臣・御鋏・4頭の獅子踊りがみられる。太鼓は、二人一組になって踊りながら太鼓を叩く。踊りの中央には、「中踊り」と呼ぶ女装した幼児が立ち、「児踊り」と呼ぶ幼児6人が小さな太鼓を持って立つ。獅子頭は、奉書紙を短冊状に切ったものを貼り合わせ獅子の髪とした重さ約 20kg ほどのもので、獅子の髪は毎回貼り替えられている。

社前での踊りが終わると、若宮社・北町・御旅所と町内各所での踊りに向かう。踊りの一行が神社を出ると、武者・神輿が町内巡行に担ぎ出される。町内各所で踊った踊り一行と神輿が神社前に集まると、「獅子の化粧落とし」と呼ぶ貼り合わせた髪を落とし、祭りのクライマックスともいべき「橋懸り」が行われる斎場橋に向かう。沢山川に架かった斎場橋から、4頭の獅子が橋から逆さに吊るされ、獅子頭で川面を叩くと大きな水しぶきが起きると、兩岸から見守る住民や見物客から大きな拍手と歓声がおこる。橋懸りの後、対岸の唐崎社前で御神事踊りが行われ、祭は終了する。

橋懸りが行われる斎場橋は、昭和 52 年(1977)に水害対策のために沢山川の堤防がかさ上げにより架け替えられ、水面まで2mほどであったが4mと深くなり、逆さに吊るされる獅子頭役、落とさないように吊るす役の人も大変な祭となっている。

祭の由来は、怨霊たたりを鎮めるために始まったと伝えられている。鋏で耕す所作や田植え唄が歌われたりするところから、田畑の豊穡を祈願する祭となっており、御神事の音色の響きは、里に春の到来を告げるものである。



御神事踊り



若宮社での踊り



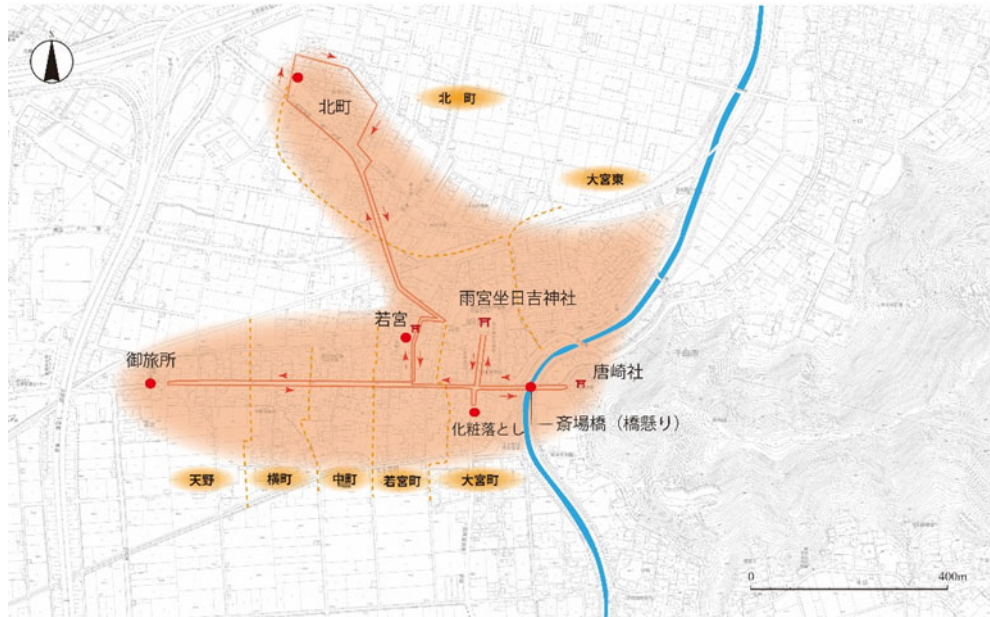
神輿の巡行



橋懸り



唐崎社での神事

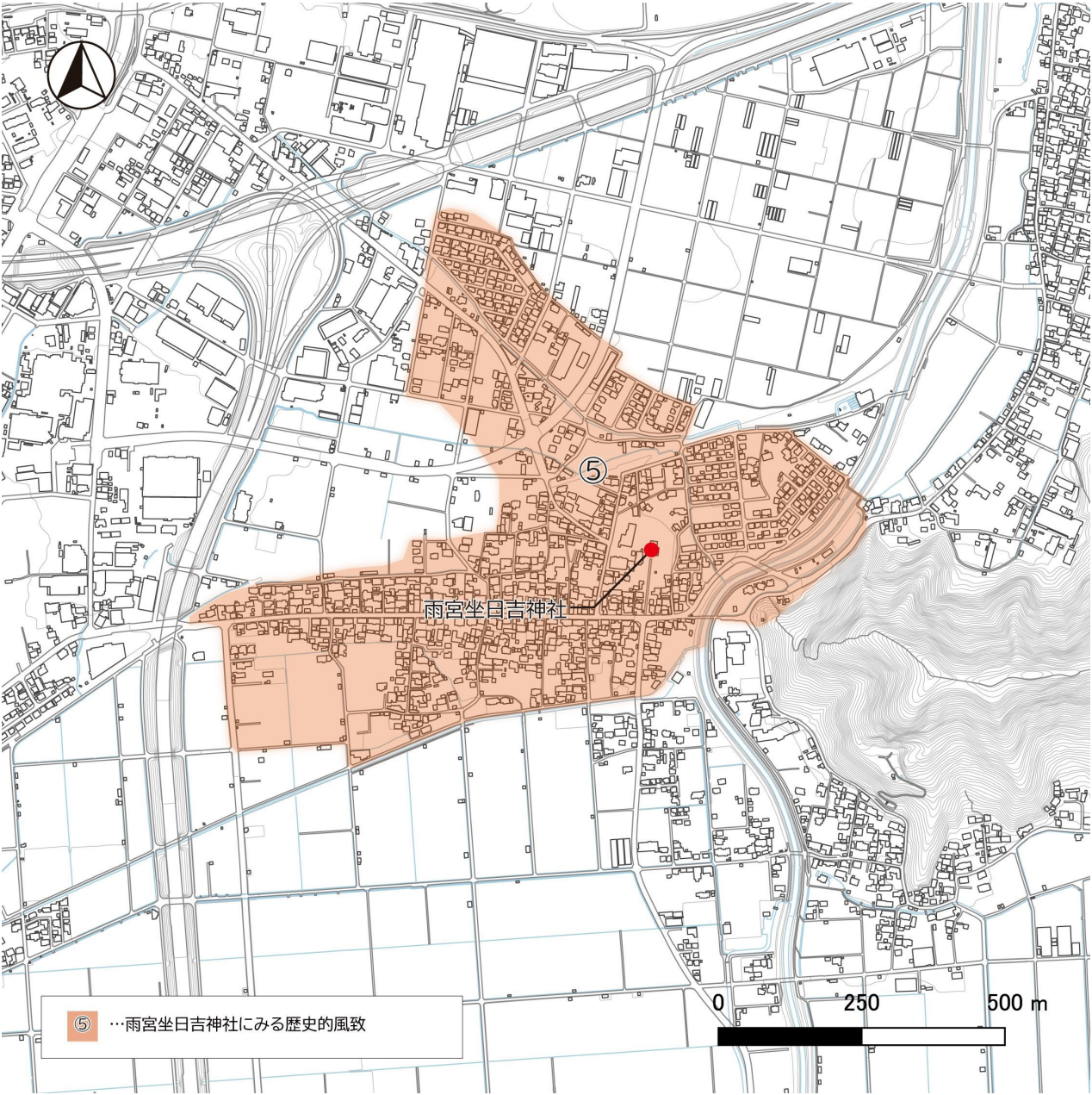


御神事踊りの経路

エ まとめ

江戸時代まで、雨宮地区とその周辺の村々で行われてきた「雨宮の神事芸能」は、松代藩主のところまで踊りを披露しに出かける地域の一大イベントであったが、現在では地区単独での執行となっている。

神事芸能は、怨霊鎮めと五穀豊穡の願いが融合した特異な民俗芸能である。また、橋懸りに代表される神事は、他に例を見ないものでもある。こうした民俗芸能が200年以上も引き継がれていることは、雨宮地区住民の伝統を誇りとして、地域の結束を図る意気込みが感じられ、鎮守の雨宮坐日吉神社を中心として、本市の特徴的な歴史的風致を形成している。



雨宮坐日吉神社にみる歴史的風致範囲

（6）あんずの里にみる歴史的風致

ア はじめに

千曲川右岸の山裾にある森・倉科地区は、東部山地から流れ出た沢山川・三滝川^{みたき}の扇状地に三方を山に囲まれ、西側に開けた傾斜地上に営まれた集落である。土壌が礫質土のため水田に適さず、大きな石や礫の多い畑地となっている。こうした畑地では、江戸時代から代々あんず栽培が行われてきた。

農家の屋敷や畑の隅には、必ずといっていいほど在来種^{あまがき}のあんずの木が数本植えられている。かつて、あんずの種やあんず干しを出荷するためや、各家庭で自家用のあんず干しを作るために植えられていたものである。主屋や納屋・蔵などの建物の脇に、今では直径 50 cm 以上、高さ 10m ほどと大きな在来種^{あまがき}のあんずの木が数本みられ、春には、集落はピンクの花で埋め尽くされる。

在来種^{あまがき}のあんずは、主に種を収穫し、果肉はあんず干しにする直径 3cm ほどの小粒の実がなる品種で、またその花は、品種改良種^{あまがき}のあんずの花よりも花の色が濃いピンク色で、大きな古木とともに花が見事である。

イ 建造物

（ア）観龍寺観音堂

森地区の大峰山の麓にある観龍寺は、間口 3 間半、奥行 6 間の茅葺建物である。創建年は不明であるが、『埴科郡史』(明治 43 年(1910))に観音堂の記述があることから、これ以前の建築であることは確実である。令和 3 年(2021)の修理により、茅葺の上に銅板を被せた。

真言宗の寺院であるが無住となっており、現在は、地元の「観龍寺観音堂保存会」が維持管理を行っている。県宝に指定されている千手観音坐像、十一面観音立像のほか、市指定有形文化財の仏像 27 点などを所蔵している。信濃三十三番観音霊場第6番の札所に数えられ、「森のお観音さん」として親しまれ、あんずの花の咲く頃には花見客が多数訪れている。



観龍寺観音堂



あんずの花でピンクに染まる集落

ウ 活動

（ア）あんずまつり

森・倉科地区のあんずまつりは、昭和 30 年(1955)の森村・雨宮縣村・屋代町との合併記念事業として昭和 31 年(1956)4月 14・15 日に「あんずカーニバル」として開催されたことに始まる。昭和 35 年(1960)の旧更埴市の広報誌にあんずカーニバル開催の記事を確認することができる。昭和 38 年(1963)に約 5 千人だった花見客は、最盛期であった昭和 50 年代には 20 万人を数えたが、現在は 10 万人前後となっている。



あんずの里スケッチパーク

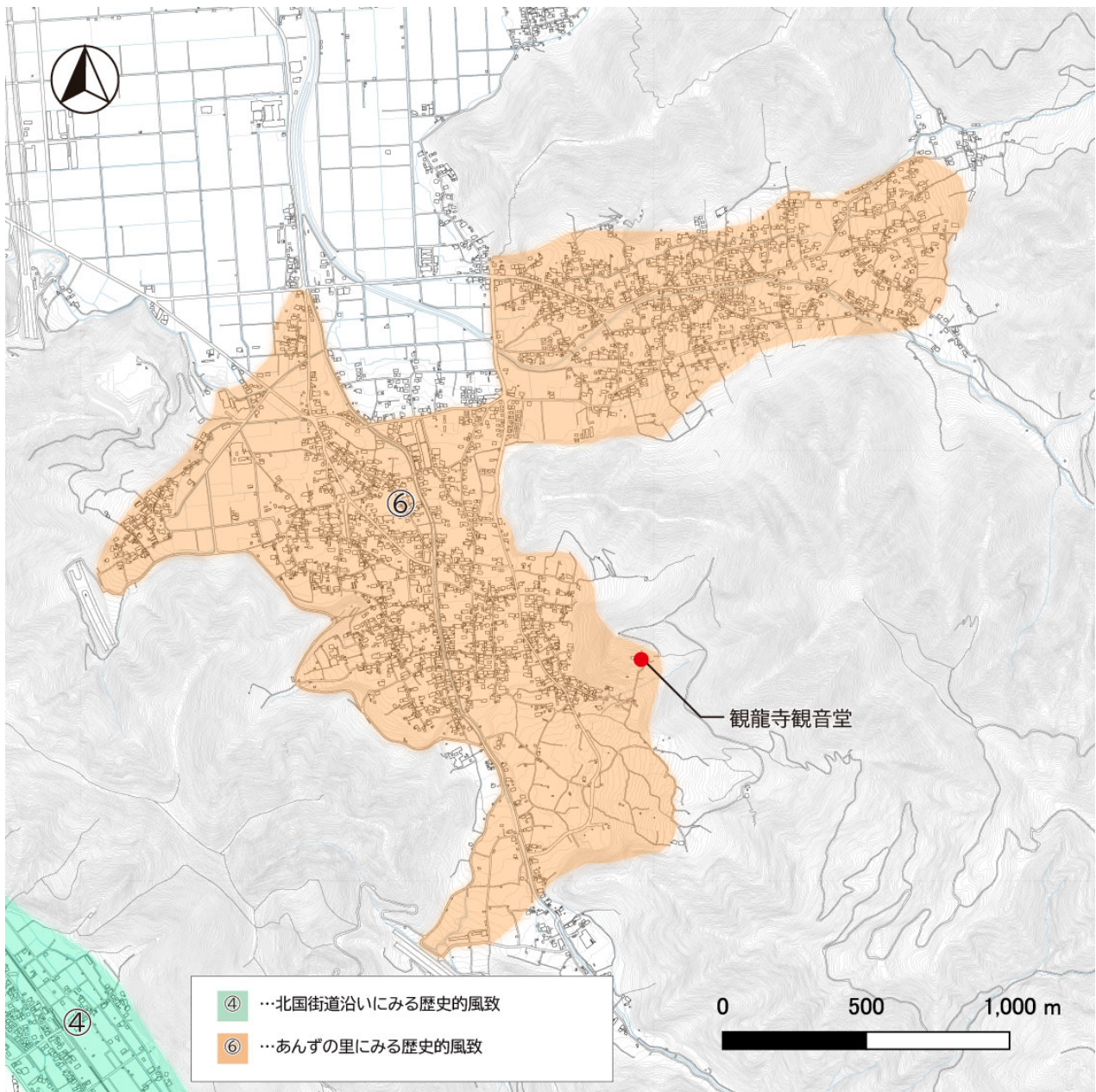
あんずの花は、桜より開花が1週間程度早いうえに、色も濃いピンクであるため、一足早い花見が行われてきた。花が満開になると、集落全体がピンク色の霧がかかったように見える。平成13年(2001)には、25品種、200本のあんずを植え、花見客の休憩・案内施設として民家を改装した「あんずの里スケッチパーク」を整備した。

まつり期間中は、最寄の屋代駅からシャトルバスの運行や、スケッチパーク内のあんずの花の夜間ライトアップやコンサートなどの催しが行われていて、大勢の観光客の目と耳を楽しませている。

エ まとめ

森・倉科地区のあんずの栽培は、生産性の低い礫質土に適した作物として、江戸時代から栽培されてきた。あんずは作物であるが、春には桜の花より一足早く咲く淡いピンク色の花で、集落全体がピンク色に染まる様子は「一目十^{ひと}万本」といわれ、当市の早春を代表するものである。

歴史的建造物と在来種のあんずの大木は、あんず栽培の歴史を物語るとともに、花見や絵画の題材や心の拠り所となっており、当市の特色ある農村景観である歴史的風致を構成している。

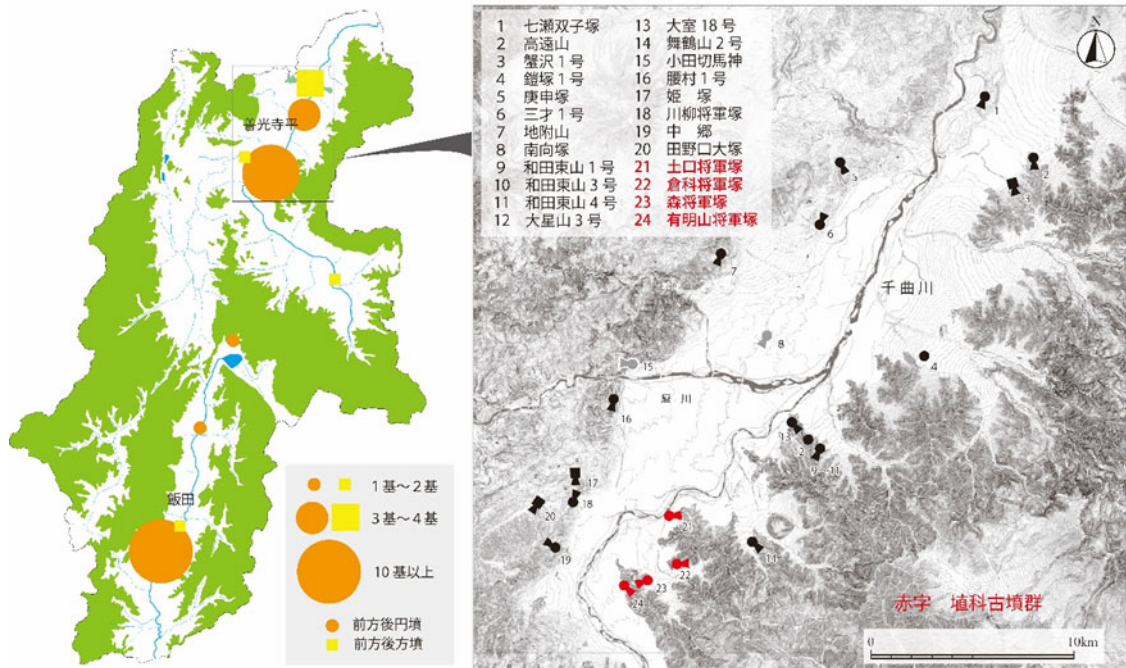


あんずの里にみる歴史的風致範囲

（7）森將軍塚古墳にみる歴史的風致

ア はじめに

千曲川右岸の尾根上には、古墳時代前期～中期の前方後円墳4基、左岸の尾根上（長野市域）にも同様に、前方後円（方）墳5基が築かれている。長野県の前方後円墳の分布から、古墳時代中期前半までは千曲川流域の善光寺平南端に築かれ、以後、天竜川流域の飯田市周辺に築かれるという特徴がある。こうした大型首長墓の変遷から、信濃国の成立やその範囲について、その発祥地が善光寺平と推察されている。



長野県内の主要な前方後円墳分布と埴科古墳群

イ 建造物

（ア）埴科古墳群 森將軍塚古墳（史跡）

有明山から北に延びる標高 490m の尾根上に築かれた、全長 100m の前方後円墳である。築造時期は 4 世紀中葉から後半にかけてと考えられ、昭和 46 年(1971)に史跡指定された。大型首長墓である前方後円墳で、長野県下最大規模を測る。

後円部の中央に長さ 7.6m の長大な竪穴式石室を埋葬施設とし、県下唯一の三角縁神獣鏡を副葬し、墳丘上に埴輪列を設けた古墳である。その特徴は、前方部と後円部の主軸に約 12 度のズレがあり、古墳が「く」の字に折れ曲がっていることにある。また、前方部はいびつな楕円形をしており、平地から見上げる部分を意図的に円く見せるように作られていることにある。これは、古墳が占地する痩せ尾根上に全長 100m 級の古墳を造ったために生じたものと考えられている。

昭和 56 年(1981)から平成 3 年(1991)まで古墳の全面発掘調査及び完全復原整備を行い、平成 4 年(1992)に一般公開された。



森將軍塚古墳

古墳周辺は「科野の里歴史公園」として整備を行い、平成6年(1994)に長野県立歴史館、平成9年(1997)に千曲市森將軍塚古墳館が開館した。

また、平成18年(2006)には、有明山將軍塚古墳、倉科將軍塚古墳、土口將軍塚古墳を含めた4基の前方後円墳が「埴科古墳群」として史跡指定された。



科野の里歴史公園

ウ 活動

(ア) 森將軍塚古墳の保存運動

森將軍塚古墳が書物に取り上げられたのは『長野縣町村誌』(明治15年(1882))が初出である。また昭和4年(1929)には、考古学者森本六爾により森將軍塚古墳の踏査、写真撮影が行われた。その写真を見ると、古墳や尾根上には大きな木はなく、畑となっていることや山道がみられ、人びとと古墳の関係をみるができる。

昭和40年(1965)に、森將軍塚古墳が県史跡に指定され、指定に伴う確認調査が3か年にわたり行われた。その結果、古墳時代前期の竪穴式石室を持つ重要な古墳であることが明らかになった。

その一方で、昭和45年(1970)頃から開発に伴う土砂採取により古墳の保存が危ぶまれる事態となった。そのため、市民・行政・研究者などからなる「森將軍塚」守る会が結成され、保存運動が行われた。旧更埴市内の全世帯の91.1%(17,275名)の保存を求める署名が集められた結果、昭和46年3月16日付けで、史跡指定を受け、保存されることとなった。(['千曲市森將軍塚古墳館ガイドブック』平成17年(2005))。この保存運動は、昭和45年



市民による古墳の愛護活動

(1970)の新聞記事で確認することができる。

昭和56年(1981)から平成3年(1991)まで11年間をかけ、古墳の全面発掘調査とその成果に基づき、完全復原整備を行った。この整備事業に伴う発掘調査は延べ700日、1万人余りの人びとが関わった。

平成2年(1990)には、保存運動を行った市民有志により「森將軍塚古墳友の会」が結成され、整備された古墳を市民の手で後世に伝えようと古墳の草取りが行われている。平成10年(1998)からは、古墳上で見学者に説明を行うボランティアガイドも4月～11月まで毎日行っている。また、平成4年(1992)11月3日、復原整備された古墳を市民みんなで見に行こうと、市民の有志による手づくりイベント「森將軍塚まつり」が開催された。以後、毎年11月3日に市内各種団体から構成する実行委員会を設け、市民手づくりイベントとして行われ、毎回1万人ほどの人出がある。



森將軍塚まつり

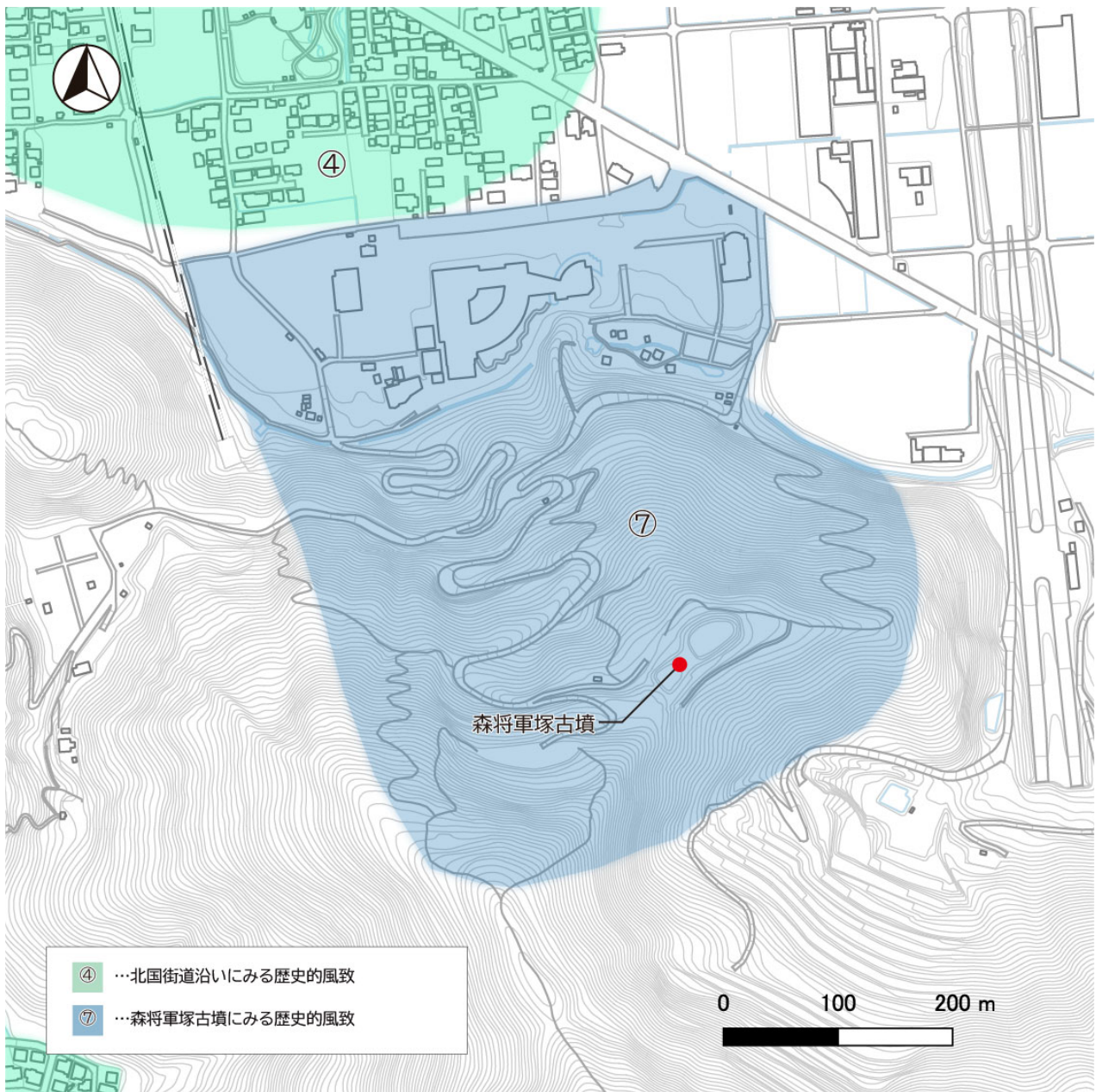
森將軍塚古墳の保存運動

「森將軍塚」守る会	昭和45年(1970)	昭和54年(1979)		
	署名活動	整備の提言		
更埴郷土を知る会	昭和54年(1979)			令和元年(2019)
	活用の提言			活動休止
森將軍塚古墳友の会	平成元年(1989)		平成12年(2000)	令和7年(2025)
	愛護活動		ボランティアガイド	

エ まとめ

長野県最大の古墳である森將軍塚古墳の保存は、昭和4年(1929)の調査から市民の保存運動を経て、復原整備されるまでにおよそ60年を要した。特に、昭和45年(1970)の森將軍塚古墳の保存運動では、市民の9割もの保存署名が集められた力は大きなものであった。そうした力が、現在のボランティア活動や、毎回1万人の参加者がある市民手づくりイベント「森將軍塚まつり」に受け継がれている。

地域に残る文化財である古墳を後世に伝えるために、市民自ら保護活動や積極的に活用を行っている姿は、古墳とともにシビックプライドを体現した歴史的風致を形成している。



森将軍塚古墳にみる歴史的風致範囲